を食した後は、今更の如く自己の裸体なる醜体に愧ぢ、全くの無智で少しも力の無い事に大いに驚き、夢から覺めて、自己の姿を發見した時に、自己と自己以外の間の區別を知つてそこに一種の悲哀を感じたのである。

僕達の現下の問題は、恰度、智慧の實を食した後の彼等の如き情態で、其の考が餘りに小さく弱いと推考する。

宇宙……生きた自然……其處には永遠の大生命があつて春の紅の花を咲かすのも、秋の紅葉するのも皆自然の大生命の力であつて、此の大生命こそ宇宙の總てに宿り、僕達の心にも居るに違ひない。一昆蟲——例へば蟻——の心の中にも確に居る。見よ蟻の物凄い勞働を。殺風景に見えるその生活の中にも花は咲く確に人間以上の智慧の實を食してゐる。而して萬物を育成しつゝあるものは、一に自然の大生命そのものである。一歩進んで此の窮り無い宇宙間の事を解けば、趣味ある面白い生涯を送る事も容易であらうと思はれる。僕達若人大いに悟るべしだ。

思ひ出を殘して

五年　馬場弘一

入學……

雪もやうやく解けて、木の芽は今しも早春のやはらかい日光を精一杯に浴びて燃え出で高らかに春の前奏曲を奏でんとする三月中旬。やさしい先生方の敎へも小學校を終へた可憐な兒童達は中學校への入學戰に惱まされてゐるのだつた。

父兄は控室に於て彼等の幸を心ひそかに祈つて、心配は顏一杯に溢れてゐる。春とはいへまだうら寒い風が少からず身にしむだが、控室の火鉢の火はカンカンとおこり父兄の顏はいやが上にほてつてゐる。

「今じぶんあの子等はどんなにしてゐるでせうなあ、どうも心が落着なくて——。」

「いやほんとに心配なもんですよ。我々のあのくらひな時の入學試驗なんていふものはさう大したもんじやなかつたデスよ。ほんとに子供もちよつと可ほいさうですな。」

「うちの奴はよく勉强はしましたが——夜などでももう寢よといふ時分までもやつてゐたのですが——どうもあれはちよつと、氣の弱い方でしてな、もうそれが今はよけいに心配ですわ。」

「えゝうちの倅はそゝつかしやで困つたものです。ですから何でもないほんのちよつとした事に間違ひなんかしてしまふので、さつきもよく注意してやつたのですが——。」

こうした父兄の心配の眞中で鶯が窓越しに何事もないかの樣に、一聲、二聲鳴ひた。互に話合つてゐた父兄の視線は同じに鶯の樂しさうな姿に引かれてゐた。控室は次第に心配の色

が深くうごいて、果ては沈默へ沈默へと沈んで行く。一刻一刻又一刻、不安はつのる。だが終に運命をつけるサイレンは春のうら若い空氣をふるはせてなり響いた。父兄の顏には新しい不安と、そして希望が泉の樣にわき上つてゐた。

「とうだつた？出來たかい？」

父の瞳も母の瞳も眞黑に輝いて大きく目ばたきする。やつと苦しい試驗場をのがれた兒童の眼もやはり異樣に輝いてゐた。

春　風……

櫻は咲いた終に、そして彼等の胸はもうはちきれんばかりにおどつてゐた。色も香りも新しい帽子、しよんとした嚴しい制服、始めてつけたゲートル、ピカピカ光つてゐる靴——その上花、花と四面花の聲にとりまかれたからたまらない。こんな樂しさが又とあらうか。

ベルがなる、小さな中學生は行儀よく机に向つて並んでゐる。春風が開けはなたれた窓から吹き來つて新しいリーダーの香が敎室一杯に、むせる樣に溢れてゐる。モダンで見るからに英語の先生らしい、チイチヤーがニコニコと黑板の前でほゝえんですらすらと「dog」の文字を輕々と書いた。そして大きく口を開いて

「dog！　一緒に」

一齊におこる「dog」の聲。先生は耳をかしげて、

「いけない。の音と。の音はちがふよ。は唇をすこし圓め氣味にして舌の後方を日本音よりもかたため、短くゥと發音するの、一緒に。！」

「よろしいでは一緒に「dog！」

どの生徒もどの生徒もほんたうにうれしさうだつた。

廣い運動場には春の太陽がポカポカと動いてゐた。その下で彼等は操り人形の樣に大手を振り大股にォッチニをやつてゐる。お日樣がうれしさうにニコニコと顏一杯に笑をたゝへて見てゐる。がつちりとした敎官はこの無邪氣な中學生をギョロギョロと鋭い眼で睨むでゐるものゝ流石にどこかに柔和なほゝえみを現はしてゐた。時々或るものゝわき見をしては敎官の恐しい聲に小さく縮み上つてゐるのだつた。しかし彼等はほんとに愉快だつた。

知　覺……

花もいつしか入學を喜んでゐる中に散り果てて世の中は、新綠もゆる時となつてゐた。そして太陽の光も餘程熱を增して來て何時とはなしにしのび寄つて來た初めての試驗が彼等の心に少なからず不安をあたへてゐた。何ぜならばその加減がわからなかつたからだ。小學校時代と同じ樣に考へてゐるものも少くなかつた、そして彼等はあまりに氣にもとめなかつたが、案外さう易いものではなかつた。試驗といふもののつらさを知る樣になつた。斯して樂しい幾日かの春の日も急に消えて何となく重苦しい試驗の一週間ばかりがつゞいた。

瞬　間……

夏は早や本格的にやつて來てゐた。木々の梢は黑い綠色に輝いて蟬が暑い日中をこの木影にジィジィとやける樣にないてゐた。第一學期は終つた。彼等の小さな胸ははけしく鼓動を打つてゐた。成績發表なのだ。今日は壇上に立つて居る先生の顏がうるんで見える。汗がたえず額を流れる。手に汗をにぎりしめて自分の番を待つてゐる。その心中たるや如何？誰々、はつと心をとりなほして、通知簿を手にして開いた瞬間：「おやおや一番だ、あゝうれしい。」「あゝ、悲しい、どうしやうかしら。」そこにはあらゆる人間の表情が現はれてゐた。天子の樣なほゝえましい顏、土にも似た悲しくもあはれな顏、彼等は歸途についてゐた。燒つく樣な太陽が彼等を見送つてゐた。夏休みは觀喜や悲感をのせて訪れてゐた。山に、海に。

青　空……

空が眞青に澄みきつてゐた。長い夏の休みによき友となつてくれた海のそれの樣に——。黑く日に燒けた顏一杯に元氣を見せて彼等は九月の今日校庭に並んでゐた。

「秋だ秋だ。我等學びの男兒の秋だ。スポーツに勉強に、最もふさはしき秋だ。」彼等の心にはそうした聲がたへずさけばれてゐた。その上彼等の心は春にまして、又樂しみが多かつた。

× × ×

今日は運動會だ。空は眞澄み、萬國旗が赤に、黃に、綠にと賑々しく、吹くともわからぬ樣な秋風に、靜かにゆらいでゐた。

どんと一發花火が城山の上空に上るや、全校生徒は動き出した。元氣一杯に動物的精氣を發揮して。すべてが歡喜の一日だつた。

夕闇が靜かにしのび寄る頃、「彥根中學校萬歲!!!」の聲高らかに夕の空氣を破つてこのアスレティク・ミイティングは終りをつけた。

斯くしてその後青空は幾日かつゞいて行つた。

運動會のすんだ後の上級生の心がなんとなく淋しく、早く一日が暮れて行く樣に思はれるあはれな心勞に反して、あくまでものんびりとした、ほがらかな心持ちで彼等の一日々々がはこばれて行くのだつた。

いつか菊の花が、あそこの庭、垣根に、醉ふ樣な匂ひをそゝひで咲きこぼれてゐた。青い青い秋の天空の下に。……

喜　び……

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮。

その上の芭蕉が歌つたこの句の樣に秋も、もうすつかり過ぎて野に山に霜が降り、やがては雪も眞白に積る寒い冬が訪れて來た。彼等の心はやがて來るべき新年の喜びであふれてゐ

た。一つ大きくなるのだ。そしてすぐに二年生になれるのだといふ事のみが念頭にあるばかりだつた。

新年が來た。大氣は何となく打ち靜まつて、新しい氣分が滿ちてゐた。そして彼等の心にもやはり新しい希望が爐の樣に燃えしきつてゐた。「一つ大きくなつたのだ。立派な中學生だぞ。」と言はぬばかりに悠々と凍り切つた道路上を下駄音高らかに、新年の空氣をゆるがせて町の中を歩いて行く。

離　別……

新年を樂しんでゐる中に、一月も暮れ、二月も過ぎて、又喜びの三月が來てゐた。

一年たつたのだ、あれからもう一年が過ぎ去つたのだ。二年生!!うれしい。

彼等は愉快にはね廻つてゐた。しかし去り行く者は悲しかつた。五ヶ年間、長い樣で短かつた五ヶ年間を、今全く終えて、校門を去らんとしてゐる者の心中——前途に待ちかまへてゐる高等學校の入學戰——。長々と御世話になつた諸先生いたはりもし、叱つても見た下級生、もう腦裏はそれ等で一杯だ。ただ夢に夢見る心地して瞼の熱くなるのを感ずる。

お、樂しかりしあの時代　入學當時のあの時よ！

やがてこの若き彼等の上にもさうした、悲哀は來るのだ。

最後に若き諸君よ、樂しき時は君等の時代だ、學ぶべき時は君等の時だ。四年、五年になつて、歎くなかれその時はもう駄目だ。又遊ぶ時は君等の時だ。今の中に中學生の樂しさをうんと精一杯味ひ給へ。

さらば諸君！我等は行く。

戰敗れて！

五年　丸岡芳之

千米突！御影師範との差、一艇身、

「エエィ！　これでもか!!」

漕いだ〳〵無茶苦茶に！　ベストを盡して!!　目が見えません、無我夢中でした。

「アート三本！　頑張つてくれ!!」コックスの聲

「ナアーニ、クソッ！オールメンバー死んでかう」

「ヨウシ！　頑張るゾ!!」

でも、その聲すら悲鳴にしか聞こえませんでした、我等の決死の努力もあゝ！　早やゴールイン!!

× × ×

負けた!!……。

「口惜しいッ！　御影の奴郎!!」

僕等は善戰しました、然し武運拙く敗戰の憂き目を見せつけられたのでした。

「口惜しいッ！　畜生!!　これで三回だ!!!」
「サア最後まで花を飾らう、オールメン元氣を出して、レデーゴー！」
ゴールから携艇場へ……、そして蒼白な面に唇をかみしめてオール、シートを持つて、溢るゝ涙を押さへて元氣よく控所へ歩を進めるのでした。でも洪水の樣におしよせてくる熱い涙を如何にする事が出來ませう、一歩々々と歩む毎に、觀衆の顏がうるんでくるのでした。コックスを先に悄然と並んで通る我等に一萬有余の觀衆は、慰めたり、激勵したりしてくれるのでした。
「彦根！　よかつたゾ！　よく頑張つてくれた!!!」
「中等學校ではナムバーワンだ！　タイムがいゝゾ!!!」
「氣を落すなよ！　來年があるんだ！　來年も亦花々しくやつてくれ！」と
觀衆に感謝しながら永久に自分から去るであらう所の石塲ク濱を、もう一度うるむ目で見渡して、萬感交々いたつて無量の感にうたれつゝ名殘り惜しく退塲しました。彼方にボンヤリかすんで見える、白青赤のボールに永遠の別れをつける口惜しさ！　悲しさ!!!　敗慘の士のみ味ふことの出來る、何んとも云ふことの出來ない、心苦しさでした。

×　×　×

「何故負けたんだ！　畜生！」
「元氣で戰つた、確かにベストを盡した！」
「正々堂々とやつたゾ！」
室屋は寂寞として唯、涙！　涙！　激勵に來てくれた、觀衆先輩も、氣の毒そうな顏をして見守つてくれるのでした。
「彦中！　ふらかつたゾ！」
「意氣で勝つたんだ！」
「師範に勝つたクルーは無いんだぞ！」
「氣を落すなよッ！　元氣を出せッ！　來年があるんだ！」而し、來年の來ない僕等です。
「來年こそ　仇を打てよッ！」
でも僕等は最早卒業するのです。來年の無い僕等に「來年こそ勝てッ！」とは、
「何故勝てなかつたらうか？」
「確かにベストを盡した！」
身を切らるゝ思ひでした。敗戰の士程、みじめな者はありますまい、人にかくれて思ひきり泣きたい僕等でした。
前に聞いた先輩の言葉を、傳へなくてはならない身になつたのか！又涙があふれるのでした。
「オイッ！　井上に大村！　來年こそは、頑張つてくれよッ！」
「俺等の仇を頼んだゾ！」
そしてシッカリと手をにぎるのでした。

「今日は皆御苦勞だつた、戰に負けても意氣で勝つたんだサアオールメン、元氣を出して、來年こそ勝つ樣になあ」と、いふコーチャーの慰めも——でもこれが諦められようか泣かずにゐられようか。
「來年こそ勝つ樣になあ——」
自分等で勝ちたい、僕等で負かしたい……、來年の無い僕等は……亦新しい涙が！
雨の日も風の日も長らく仕へてくれた、ミスナガラよ！僕等は去り逝くのだ　永遠の別れだらう、亦會ふ日まで！涙ながらに別れを告げる僕等でした。
さらば！　ナガラよ!!　（終り）　一九三三、八、十

いてふ

五年　橋本末藏

こゝ數日の中、みてるまに黄ばんで風もないのにはら〳〵散つてるいてふの葉。一年の弟等が帽子や何かを投げたりして、あやふく枝についてゐる眞黄な葉を落しては喜んでゐるのを兩手をポケットにつゝ込んでもたれたまゝ何も云はないでぼんやり眺めてゐる五年の兄達。すつかり大人びて年寄くさい青白い顏。血の氣のない顏。何か考へてゐるんだらうか何を考へてゐるんだらう。

寂しさうな姿の五年生、影のうすい彼等。彼等は考へてゐる。此の學校の一年生となつてから五年の今になるまでの追憶に耽つてゐるのだ。一年の弟のいたづらを眺めながら心は過去の夢を追つかけてゐるのだ。
ピーロロ、城山の上でとんびが舞つてゐる。
此の頃となつて急に寂しくなつた彼等。降つても照つても憂鬱な彼等。何が彼等をさうさせたのだらう？　迫り來る上級學校への試驗準備が、やがて出づべき實社會の荒波の余波が、そして後もう數へる程しかない日の後に迫つた卒業がきつと彼等を憂鬱にさせたのよ。寂しくさせるのよ。
卒業とは、それは嬉しくて悲しいもの、代名詞のやうに彼等には思へた。
華かな中學の五年の過程を將に終らんとする彼等、卒業を間近に控てた彼等。彼等が過去の嬉しい追憶に耽るのも無理はない。樂しい思ひ出が見るにつけ聞くにつけて湧いて來るのも尤だ。
一年の頃、二年の時、三年の頃、四年の去年、そして將に終らんとする五年の今日。
校庭の櫻は五度咲いて散つた。一本そびえた校庭のいてふも五度黄葉して將に名殘惜しくも五度目の落葉をはじめてゐる。
ピーロロ、城山の上ではまだとんびが輪を描いてた。ヒタ〳〵いてふの葉は地に落ちた。

近江舞子にて

五年　丸岡芳之

盛夏の午後の太陽は、飽く迄湖面に輝き渡り、一碧の海の笑顔に愛嬌ばかりの白波を立ててゐる。此の砂濱こそ神の創造によつて出來た、哀れな自然の樂園を求めんとする人の子の遊び場である。彈力のある波打際の砂路、本當に塵埃を離れた別天地である。自然の美と、人工の美との――。

晴着にモダーンなパラソル、短いスカート踵の高い靴、鮮な海水着、自然の巧なカンバスに向つて塗抹せらるゝ人工の目も覺むる樣な繪具、そして出來たこの舞子である。

青春の我等の視線はしきりと牽制せられる。

中學生のキャンプ生活、海童の思ひ〳〵の泳ぎ方、水の掛け合ひ、汗にまみれてボールをにぎる元氣な學生、樂しそうな笑聲、これ皆彼等の自然を讃へるメロデーである。湖の彼方を爆音高く納涼客を乘せて走る發動機船、磯の鴨の晝寢の夢を破つたのであらうか、パッと一時にとび立つた。砂遊びに余念のない子供達、築いては壞し、壞しては築き、掘つては埋め、埋めては掘る、丁度鬼の居ない賽の河原の砂遊びである。

時の立つにつれて、濱は段々と人の山を築くばかり……。

この人山の中には、流行の尖端兒もゐるだらう、或は軍國の秋とか、國難とかを論ずる憂國の士もゐるだらう、私は人心の腐敗を述べると同時にスポーツの一般化を述べたい。

平和の煙は松並木を縫ふてゐる、皆のんきである、青松の間からジャズが流れる……憧憬の濱近江舞子……。

鶸日記

四年　西島輝夫

坊つちやんの大切な鶸が死んで、鳥籠を掃除していると、籠の隅の方に何だか變なものがあるので取り上げて見ると、それは亡くなつた鶸の日記だつた。中を開けて見るとこんな事が書いてあつた。

五月三十日

私は今日の悲しき又珍らしい日記を書く時泣いてよいのか笑つてよいのかさつぱり分りませんでした。

今日も又何時もの樣にお日樣がにこ〳〵と上つてお出になりました。お父さんやお母さんはお日樣に何時もの御挨拶をなされて、私達の朝飯をとりにお出かけになりました。何時もの樣に私達が戻つて來る迄は決して外へ飛び出してはいけませぬよといふ言葉を殘して。でも、私達兄弟三人は此頃ではもう可成り飛ぶ事が出來るようになつていました。そして今

日はお父さんも、お母さんもお歸りが何時もより大分遲かつたのです。私達は退屈なものですから巣から一寸出たくなつたのは當然の事です。中でも兄弟中でも一番スポーツマン？の私はお云付に背くのは惡いとは知つて居ましたが、一寸外の枝に止まつて朝の運動がしたかつたのです。でもそれがいけなかつたのです。私がバタ〳〵とやつと枝に獨りで止まり他の兄弟に自慢した時でした。いやなヒューンと云ふ音がして同時に足に非常な打擊と痛みとを感じました。そして私は何も分らなくなつてしまひました。

暫くして眼を覺ましますと私は或る一種のいやな暖さを体の周りから受けて居ました。それは私は人間の手の中に握られてゐたのです。私は始めて人間といふものを近くで見ました。そして尙驚いた事には、私に石を投げて傷付けたのも、此の樣に優しくして下さる坊つちやんと同じ人間だつたといふ事です。

私は片方の足の自由を最早失つてゐたのです。私は不具となつてしまつたのです。私は悲しくなつて來ました。途中坊つちやんは、私を鳥屋とか云ふところへ連れて行かれました其處には未だ出合つた事のない仲間達がたくさんいて、色々と歌つてゐました。そして其處で私の名を問はれました。

すると未だ年若い鳥屋さんが、私の顏をちらつと御覽になつて「あゝ、此の鳥は鶸と云ふ鳥です。」とおつしやいました。私は思はず吃驚りしてしまひました。確に私は今迄に一度だつて此の人とは合つた事がないのに、私を一目見るなり私の名を云ひ當てるなんて全く立派な人間だなと思ひました人間は一寸ばかり我々より頭がよい、中でも此の人は鳥博士か、そうでなかつたならば名前博士とでも尊稱のつく人間に違ひない。坊つちやんは口の中でしばらく、鶸、鶸、鶸、と繰り返へしておられた。鳥屋さんは「この鳥は未だ子供ですから磨り餌を喰べさして上げなさい」と云はれました。私は磨り餌で一体何んなものかしらと思つていました。

突然ガラ〳〵といふ音がして邊りが眞暗になつてしまひました。何だと思つたら坊つちやんのお家へ着いたらしいのです私は初めて人間の家へ入りました。私達の家とは形も大きさも大變違つてゐます。一番變に感じたのは私達の家の樣に入つたらすぐ寢床の無い事です。すると坊つちやんが何か申しました。「只今」とか、何とか申しました。これは後になつて分つた事ですが坊つちやんの兄さんが歸つて來られました時にも此の「只今」といふ事を云はれました。私の推量した範圍では此の言葉は人間が家へ歸つて來た時に云ふ言葉らしいのです。そして私はおかしな箱の中に入れられました。すると私は急にお腹が空いて來ました。早く餌が戴きたいな。あの磨り餌が。でピピと呼ひました。すると坊つちやんが來て「足が痛いで泣いてゐるのだな」とおつしやいました。で

私はあはて、「違ひますよ。違ひますよ。お腹がペコ〳〵なの。ピピピ」と申しますと「はゝん、腹がすいてゐるのだな」とおつしやつて又何處かへ行つてしまはれました。

暫くして餌を持つて來て下さつたのかと思ふと、餌どころか坊つちやんよりも大きな強さうな人を坊つちやんが連れて來られました。私は一体どうなるのかと心配しましたが、坊つちやんが其の大きな人に向つて「お父さん、この鶏お腹が空いてゐるの、何かやりたいのだけど、お父さん、ねえ、磨り餌ていふの買つて頂戴」とおつしやいましたので、この大きい強さうな人は坊つちやんのお父さんである事が分りました。そして大いに安心しました。

「お父さん、この鶏足が不具なの。」

「どれ〳〵、うゝん、これを八幡さんで拾つて來たのか、成程。可愛想にね。」

「お父さん何か食べ物やらなくていゝの。」

「うん、でもな、此の鶏は子供だし足がいけないのだし、大分弱つてゐるらしいから磨り餌よりか卵の黄味がよいよ」

「僕卵とつて來よう。」

「あゝ、そしてね、其の卵蒸すんだよ。」

まあこんなわけで私は鶏とかいふ私と同じ鳥の仲間の卵を喰べる事になつたのです。初めは何だか鳥の卵なんて恐しかつたが思ひ切つて喰べました。斷然おいしかつたです。もう一口、もう一口、私は知らぬ間にたくさん喰べてしまひました。私が多く喰べれば喰べる程坊つちやんと、坊ちやんの兄さんと、お父さんは喜んで下さいました。私はせめてもの御恩返しに、一寸でも喜ばして上げたいと思つて頑張つて出來るだけたくさん喰べたです。

夜がやつて參りました。又嫌な夜が。坊つちやんは私の入つてゐる箱の前に黑い布を下して下さいました。今夜は生れて初めてお父さんや、お母さんや、兄弟達と離れて一人で寢るのです。今夜はこわい梟の小母さんの聲も聞えません。でも今日あつた事を靜かに思ひ浮かべて見ますと餘りにも悲しくて中々眠れません。

五月三十一日

今日はどうしたのか朝起きた時から頭が重く体がだるくてたまらない。昨日の晝からの、あの元氣はどこへいつてしまつたのか分らない。もう卵の黄味を喰べる元氣すらもない。只今朝になつて水を一寸ばかし飲んだだけだ。そして其の上に今日に限つて足の痛みがぐい〳〵と身にこたへて來ます。坊つちやんは學校へ行かれました。私のこの家で一番好きな最も頼りとしてゐる坊つちやんは學校へ行かれるし、家の人は今日は晦だとか何とかいつて私なんか一寸もかまつてくれない。私は寂みしくなりました。と同時にお父さんや、お母さんや兄弟達が懐かしくなつて來ました。もう一度あのもとのお家へ歸へりたいと思ひました。でも何にしても早く坊つちやんが歸へつて來て下さればよいと思つてゐました。でも其の日の晝からです。私は最早動く事さへも嘴る事さへも出來なくなつてしまひました。そして足は益激しく痛み出し一体どうしてよいのか分りませんでした。三時頃坊つちやんが歸へつて來て下さいました。そして私の元氣のないのを見て非常に心配して下さいました。それから私を日向の處へ出して下さいました。そして水をかへたり箸の先に卵の黄味をのせて喰べさして下さいました。けれど私は最早一口も喰べる事が出來なくなつてしまいました。坊つちやんは今にも泣きな顔をして「どうしたんだらう。ほんとうに、大變弱つてゐさうる」とおつしやつて又布をかぶせて寢さして下さいました。私はも早動く事さへも出來なくなつてしまつてしまひました私は此の儘死んでしまひさうな氣がします。

六月一日

私は昨夜一睡もとらなかつた。身は益々衰弱し最早眼が霞んでしまひました。私は愈もう今度は助からない樣な氣がします。すそう思ふと思はず泣けて來ました。噫、私の大好きなお父さん、お母さん、そして兄弟達、私はもう一度死ぬ迄にあひたい。そしてもう一度お父さんやお母さんに抱いてもらひたかつた。もう一度でいゝ、たつた一度でいゝから。あゝ、だん〳〵眼が見えなくなつてまゐります。あゝ、お父さん、お母さん私はもう一度合ひたい。あゝ、もう一度あの大空を、あの青空を飛んでみたい。もう一度でいゝ、お父さんやお母さんの口から餌を喰べさしてほしい。私は成程親の云ひつけもきかずに生意氣な眞似をしたその不幸の罪は重々感じて居りますが、だけど〳〵あゝもう私は駄目だ。私はもう自分の身が自分の身と思はれなくなつてしまつた。あゝ……。

日記はこゝで終つてゐる。恐らくもうこれ以上書く力がなくなつたのだらう。

翌朝坊つちやんが來られた時は最早小さい魂は、二度と歸へる事のない天國へ旅立つてゐた。坊つちやんは唯無言でじつと鶏の骸を眺めて居ました。そして何時の間にか眼に白い露が光つてゐた。

山の日出、海の日出

三年　安藤權一

肌寒き冷氣に身振ひをしながら、海拔千三百七十七米の伊吹山頂に、私は美しき御來光の狀況を腦裏に描きつゝ、東の空を見つめて居た。黎明の薄明るい光を便りに、時計を見れば四時十分である。周圍はまだ薄暗く、非常に靜寂である。唯東の空がほんのりと明るく、頭上には曉の明星がきらめいて居り、あちこちに三人五人と御來光を仰ぐ爲、佇んで居る

人々が黑く見える。

前方の雲が赤く燒け始めた。その附近の空の色は、何と形容してよいか。とても人工では表し得ない程麗しい。刻一刻空は明るくなる。

突如、東空の雲上より、さつと金色の御光が迸り出た。おゝ、その瞬間。忽ちにして人の顏、靄に包まれて居た測候所、山の肌の色、雲の色が判然とし、曉のぼんやりとした墨色のあたりの氣色は一變して、朝の美しく淸爽な狀景を描き出したのだ。時、正に四時半。俯瞰すれば、美濃の山々であらう。幾條もの山脈が白雲の海の中を、恰も夢の如く走つて居る。見る〳〵中に御光は廣がつて行き、前面の城壁の樣な雲は益々赤く燒ける。私は金色の御光と、コバルトの空と、絕えず變形する雲の赤く燒けて居る所を見つめて、今か〳〵と御來光を待ち焦れて居た。

五時八分、時計より目を離すと、あゝ、御來光である。眞赤な〳〵太陽が、頭角をほんの少し現はした。と見る間に赫耀たる大きな日輪は急速度で回轉しながら、我等の前に悠然と其の全貌を現はしたのだ。何たる雄大、何たる崇嚴、何たる英姿！其の時、後方で劉喨と喇叭は吹奏され、一入嚴肅の氣に滿ちた。嗚呼、昭和八年七月卅日の曉は、今や明け離れたのだ。私は此の嚴かな、而も麗はしく、而も眞紅の太陽を仰いで其の森嚴さに打たれ、全身は緊張し恍惚として見入つたのである。人々の顏は黃金色の旭光を受け、又御來光を仰いた喜びとで輝いて居る。頂上一杯咲き亂れて居る名も知らぬ花や草に宿つて居る露は、朝の光にきら〳〵光つて居る。空はからりと晴れた紺靑色。何處か遠くで鶯が微かに一聲鳴いた……

私は伊吹に登山し、幸ひにして此の御來光の美觀を、擅に眺めることが出來た。又私は幾度も熱海の海岸で、海の日出をも仰いだ。

海。男性的な洋々たる太平洋より昇る旭日は、實に活き活きと元氣が溢れて居る。赫々とした太陽が水平線上より躍り出るその時、忽ち紺碧の海上には黃金の波がきらめくのである。伊豆半島の一角に、寄せては返し打ち寄する波。其の波も金色だ。沖よりうね〳〵とうねつて來て岸にど、と碎ける白い波頭は、忽ち飛沫と共にさあ——と押し寄せて、濱の眞砂に波の跡を附けて引いて行く。遙か水平線の彼方には初島と大島が、仄かに浮いて居るもの、如くに見える。雲も、波も、眞砂も、磯馴松も何もかもが皆朝の淸々しい太陽の光線を受けて、歡喜の聲を擧げて居る樣だ。高く鼻つく磯の香を嗅ぎ、强い朝日の光を斜に浴びて、ひた〳〵と裸足で汀を歩いて行く時、獨り我が心は海の如く廣々とし、太陽の如く淸淨となり、壯快さを覺えるのである。

山の日出、海の日出。日の出こそは山と問はず海と問はず

實に雄大であり、且つ淸新である。潑剌たる眞紅の太陽が東天より悠然と昇る時、萬物等しく喜びの聲を擧げ活き〳〵として一日の活動をし始めるのである。山の日出こそは崇嚴、且つ靜寂そのものである。海の日出こそは華美、且つ躍然として居る。

旭日。私は山で海で、朝靄を拂つて昇る太陽の雄姿を仰ぎ得たことを、最大の喜びとするのである。

御來迎

三年　林　秀夫

ふと周圍の雜音に眼が醒めた。「ああ頂上の小屋に居たのだな」と直ぐに思ひ出した。

上衣の下に毛絲のジヤケツを着て居てもまだ身の內が何と無くぞく〳〵する程寒い。低い窓から外を見ると霧は晴れたらしく、そろ〳〵白みかかつた。東雲の空には星が瞬いて居る。頭の上では、薄暗いガス燈の焰が時々搖れて居るが、其の光も段々薄くなつて來た。

外へ出ると、曉の冷氣がさつと頰を撫でて、眠氣が一度に醒めた。御來迎を拜む爲に測候所の東の方へ向つた。測候所の石造の觀測臺の橫に、今、地平線から上つたばかりのオリオンの三つ星が消えなんばかりに淡く光つて居る。足元には色とりどりの美しい花が咲き亂れて居るが、其の間に、隱れて居る濕つた赤土の路は、ともすると、人の足を掬ひさうだやや、土地の凹んだ處に日盛の附いた、高さ、丈餘の柱が有る降雪量を計る爲の物であるが、時には此の柱も、埋れてしまふさうだ。

露に置かれた、星影を踏みながら測候所の橫へ來た時は、人はもう大分集つてゐた。

風のある爲に、風力計がぐる〳〵勢よく廻つて居る。目の下は只、茫漠と霧が立ち込めてゐる。丁度波の無い時の、靜な湖面の樣だ。西南の方には、雲海の中に、靈仙が呼べば、答んばかりに浮んでゐる。四方、皆霧であるから、山の頂に居ると言ふより、絕海の孤島に居る樣な、氣がする。時々、霧の破れ目から麓の春照や上野の家々の灯が、見えるが、下界はまだ、平和に、寢て居るのであらう。

東の方には、黑い雲が、恰も海中に屹立する、巖の樣にそびへてゐる太陽はあの見當から出るのだらう。

間も無く上空に有る、一片の羽の樣な、雲が薄赤く、目に見えぬ位、染まり出した。其の色は刻、一刻、と强さを增して來る、と見る間に東天に美しい太陽の廻折像が現れ出した平たい、レンズの樣な形の薔薇色の光から、半月狀に、圓に遂には、楕圓形になつてその高さは頭上にまで及んだ。此は平地でも見られる薄明の現像であるが、山は殊に、空氣が澄

んでゐる爲、それと藍色の空との限界が、はつきりしてゐるさつきの雲は愈々、其の色を增して來た。地平線に有る雲の緣はもう燃え立たんばかりに、輝いてゐる。

暫くして、太陽の昇る邊からは、强い光の、放射狀の旭光が現れ出した。旭光、光を增せば雲一段と燃え、四邊は、刻々と明るくなり出した。雲一としきり輝き、旭光、增々、光ると見る間に、雲間から眞紅の太陽が、其の頭を表した。その瞬間、今まで仄白い薄明の光に照らされて居た、あらゆる物体は一時に紅に燃え出した。山小屋も、日本武尊の御石像も、山頂に群れてゐる人々も、今は唯紅一色に染め盡された測候所の風力計も、茜色の環と化して、廻つてゐる目の下の霧の中に起伏してゐる、山々はまだ其の綠色の頂に一と刷毛でなすつた樣な雲をいたゞいて、靜に寢てゐる。

人々は此の偉大な大自然の風光に、醉つてしまつた樣だ。

おゝ、何と云ふ偉大な景色であらう。太陽は今全くその姿を表し大和民族の愛國の熱血を表徵した、日の丸そのまゝに東天に燃えて、ゐるではないか。僕は此の大自然に接して途中の苦しさを忘れて、心の中で萬歲を叫んだ。

夜寒

三年　林　榮一

秋だな！

まだ少し黃色い滿月が東の山から出た。柿の木がはつきりと黑い陰を豆畑に落してゐる。さうだ柿も色付きかけた、黑い砂糖も澤山付いて來た、もう食べられるぞ。

すつと涼しい風が吹いて來た、おゝ涼しい！、毛穴もしまる樣だ。頭がはつきりするあの滿月の樣に。此の涼風もあの名月から吹いて來るのがしら。あの夏休みに登つた伊吹山の一二合目を吹いてゐた風の樣だ。

チッチチ、チッチチ、ヂーヂー、此の草の中で鳴いてゐるのか、あそこか、家の軒か。秋の野は虫の聲で一杯だ。秋は虫の世界だ。虫の一聲々々に秋は深くなつて行く。ヂッヂヂッヂと虫の聲に送られて涼風が頰を過つてゐく。

秋は燈下親しむ時だ。それは秋の夜の涼氣だ、秋の夜長であることからだ。

天地を靑白く輝らしてゐる月光はすごいばかりだ。「あれ！猿が餅を搗いてゐる」。月を見てゐた妹が言つた。聞いてゐる者吹き出さずには居られない。猿とは又無風流な？母が餅搗く兎の話をし出した。兎の姿が濃くなつて來た樣だ秋は又名月だ。「月々に月見る月は多けれど月見る月は此の

月の月」。虫の聲の繁くなるにつれて、周圍は靜かになつて來た。兎の話を聞いてゐた妹も家に入つたらしい。

あゝよく涼んだ、否よく涼めた。あゝ氣持が好い。

秋だな！

その感じを充分强め得た。さうだ秋だ！秋だ!!爲すある秋だ。第二學期だ。

小屋の赤い煙突の上に一段と靑白く月が冴えてゐる。

暮れて逝く秋

三年　井上　惣重

太陽は西に傾いた。電燈は點つた。一日の勞働は今將に終を告げようとしてゐる。そして今日一日も暮れようとしてゐる。

「天高く馬肥ゆる秋。」それははや晩秋となつてしまつたそうしてあの寒い冬が訪れやうとしてゐる。

ごーつ、と吹き來つた一しきりの風で、木の葉は散つてゆく。おゝ!!木の葉は散つてゆくんだ。木枯しの爲に。然し木の葉ばかりが散るんではない。我々もやがては散つてゆくんだ。どんな嵐の爲に散るかは分らないけれども。しかも我々は刻一刻とその散つて逝くべき嵐に近づきつゝあるんだ。ごーつ、又一しきり風が吹く。おゝ、寒い。

「ごーん。」折柄聞ゆるどこかの寺院の暮六つの鐘。鐘の音は蕭々として餘韻を引きつゝ、あたりの靜けさを破る。又一つ、「ごーん。」淋しさと哀れさはだん〳〵と物凄くなつて行く。

遠か東の彼方の空に、峨々として聳える伊吹の嶺峯。丁度今月が微笑みを以て、出現しやうとしてゐるのが、おぼろけに見える。

荒れすさみ果てた野原、あまつさへ、紅葉化したあちらの森、こちらの林。點々として刈り殘された稻のほのあるのが自分の目に映ぜられる。

晩秋の夕暮の哀愁は何處に滿たされてゐる。

長い樣な、又短い樣な秋も淋しく過ぎて行く。すべて皆、夢、はた一繪卷物の樣である。

先刻迄は、あれほど騷がしかつた、近所の少年や、少女達も家の中へ入つてしまつた。彼方、此方の村里からは煙棚引き、もやが被ひかぶさつてゐる間から、ちら〳〵と灯が眺められる。

ごーつ、木枯しは容赦なく荒れ狂ふ。

いづこからともなく笛の音が聞える。ほんのかすかに響いて來るんだ。いゝ音である。いゝ音ではあるがしかしそれは悲しみのある音だ。それは木枯しの爲に散つて逝つた木の葉共が、何か囁き合つてゐる樣に聞える。何となく、散りゆく

ものとしての心持を表はしてゐるようだ。
おゝ、田舍の晩秋だ。暮れて逝く一僻村の黄昏なのだ。
靜かなる秋の夕暮よ。それはあまりにも靜かすぎる。哀れすぎる。
眞紅に輝いて居た太陽は、遂に最後の暉を我々に與へ、一日の暮れ逝くことを惜しみつゝ、西の彼方に沈み逝いた。
雀は自分の巣へ歸つた。鳥も三々五々と、鳴き乍ら、自分のねぐらへ急いでゐる。それも今はもうはつきりとは見えずうつすらと空にうつつてゐる。
農村に忠實な百姓達も稻刈歌を終つて、悅しげに家へ歩を運ぶ。
あゝ、晩秋も刻々と立つていく。
今日も暮れた。晩秋の一日も暮れて逝つた。淋しく、且つ哀れに暮れて逝いた。それはまがひもなく丁度、木の葉が、木枯しの爲に散つて行つたのと同樣である。

暮れてゆく秋
さびしく……
悲しく……
靜かに……
おゝ!!
それは恰も物思ひに沈んで居る樣だ。
あゝ!

心は走り、氣は急ぐ
時はたつてゆく
なすべきことも果せず。
あはれ!!!
秋の日の短かさ
そして日一日と
秋の日も暮れてゆく
あゝ、秋の日も!
あゝ、晩秋

秋の頃

三年　杉山十三雄

神無月になると、秋も漸く更けて行く。櫨や楓は美しく赤みを帶び、銀杏楠の葉は黄色くなつて、松茸の香氣と共に如何にも秋らしい。空は限りなく澄み切りて窓を越して、遙かに見へる山の秀麗な姿。冴え〳〵とした清らかな空氣、秋の日は高くてふり仰ぐ眼に眩暈しい光を投げかける。
蜻蛉の群が篠をひく樣に飛び交うてゐる。過ぎ去つた夏の想ひ出が、滾々として泉の樣に湧いて來る。畑には紺青の滴るやうな茄子や、色のよい胡瓜や、紫蘇や青唐辛等の夏の野菜で一ぱいだつた。

曉の風が吹いて、合歡木の梢には朝早くからかしましい蟬の聲が騷がしく聞えた。それが何時しか哀調を帶びた茅蜩に變り、やがてそれすらも聞えなくなつてしまつた。天日紅の枝には、油蟬や黑い小さい蜻蛉が止つて居た。そして隣家の惡戯小僧の爲に、白い大きな蟲捕り網でつかまつては頭を刎ねられたり羽をもぎ取られたりして果敢ない最後を遂げるのであつた。今はその天日紅に、せんごく豆の蔓がからみついて澤山實が出來てゐる。
夏の頃は數多の花卉を愛賞した。晝顔白粉の花、鳳仙花、葉鷄頭、石竹、金盞花などの質朴な、驕らぬ花。殊に可憐であつたのは雛芥子の花だつた。
涼しい秋風が立ち初める頃となるに連れて、地上は衣更へを始めた。その遷り變りゆく有樣を——秋の美しい紅ひに遷るのを眺めつゝ、秋が訪れて來たことに對して、私は大自然の前に心から感謝した。曠野に立つて喜悅の歌を口ずさみ、歡喜と輝かしい希望とに、血潮が躍動するのであつた。山も川も草も木も、初秋の曲を朗かに合奏し、微風が幽かに妙なる音を伴奏してゐた。
二百十日も無事に過ぎて、田園には秋の收穫がいよ〳〵實のつて豐作を思はせた。それでも田園には哀愁があるらしい私の家に來る農家の人は、愚痴を列べたり、世間の不景氣が齎らす生活の苦しさをよく語つた。農村の疲弊の爲なのだらうか。私は苦しさうな巷の騷音を聞き、又悲慘な世の相をあり〳〵と見せつけられて、頽廢した落莫たる憂鬱を痛切に感じるのである。
自然の氣配は、人間の住む此の大地を、清淨化して呉れた秋色は日毎に濃かになつて行く。
桔梗や撫子は、いつの間にか實になり、朝顔の花も日增しに小さくなつて行つた。嫋々として靡く纖い薄が、岡の邊に十五夜を待ちまうけ、そしてそよ風に吹かれる度毎に、丸い大きな月魄に頭を下げて、幽に囁いてゐた。
九月十三日は產土神の秋の祭禮だつた。お宮の大太鼓を敲く音が蓼々として秋空に響き渡り、神樂笛の音も遠く近く聞え、子供達が嬉しさうに着飾つて、我も〳〵と境内へ吸ひ込まれて行つた。鉦などの囃子も賑やかに、子供心をそゝり立てるに充分です。赤い風船玉についてゐる笛の面白い音、露店の並ぶ祭氣分。繪馬堂に入つて私は幼時の祭の樂しかつた夢を思ひ浮べてゐた。田圃道を通る女人の美衣や蝙蝠傘も祭だけで、珍しく綺麗だつた。
夜毎に、しら〳〵と水煙立つ銀河の、洋々たる流を仰ぎ見る。銀星が耀々と輝き、白い霧が冷い光を含んでいつか紫色の、詩的な夜が訪れるのである。鏤りばめた群星を森とした庭に立つて、瞬動もせずしてじつと凝視した。全く金米糖の樣だ。寂寞した四邊——木立の繁みに瀘された月光の班……

淡い夢の樣な雰圍氣に包まれて、すつかり魂を奪はれ、無我の境を歩むのであつた。

大輪の眞紅のダリアが、花園に艶麗の姿態を誇り、人の心をかき亂すやうに美しい。氣高くて香りの良い菊の鉢植は、君子の德と花の王者の風格を具へてゐる。隣家の軒端にコスモスと紫苑が今を盛りと咲き亂れてゐる。コスモスば冷たくて匂はしい花、淸淨ではかなく手弱女の樣な花である。

蒼然たる夕暮の色濃い秋の日暮れ、黯ずんだ氣が漲つてゐる閒寂としたあたり、胸に立つ漣が譯のわからぬ佗びしさを誘ふ。啼が熱くうるむで來る——。その時古寺の大屋根に鳴く鴉の淋しさ、蕭々として人の心は傷められる。鐘の音の流れと共に山の古巢へ暮地に歸りを急ぐ烏の群。その山々には鶸・目白・山雀・頰白などが住んでゐる。秋半ばの山は茸狩りで賑はひ、美味しい匂ひが麓の里まで流れて來る。

秋深し！酣の秋、それも次第に老いてゆく。もう落葉だ。落葉を踏みしめて歩るく靜寂なひと刻——。落葉を焚く煙りがほの〆〆と、薄紫に立ち昇る林の中の徑。雅趣に滿ちてゐる。宛然詩であり、泰西名畫の一幅の畫ではないか。秋の氣が深く漂つてゐる。もうやがて晩秋初冬なのだ——。

「停車坐愛楓林晩。霜葉紅於二月花。」晩唐の詩人杜牧はすつかり秋の詩境に浸つてゐる。これからが眞の秋である。地上は錦繡に飾られて絢爛たる美の國を現出する。秋の頃我が生命伸ぶ時、詩よ歌よ！我が心の源泉に湧き出でよ。

馬蹄の響

三年　伊藤芳男

秋の夜は刻一刻と明け初めて行く。昨日から降り始めた秋雨は今日も降り續くのであらう。風と混つて强く烈しく雨戸を叩く。僕は今書齋に閉じ籠つて今日の課業の豫習をして居る所だつた。

其の時、曉の靜寂を破つて遠く彼方から聞えて來る快き音響、パカッ、パカッ、パカッ、パカッ、といふ軍馬の蹄の音ではないか。時々微かに聞ゆる軍馬の嘶く聲。今迄の陰鬱な氣持は一時に搔き消されて、勇壯なしかも心强い感謝の新しい氣分は四邊に漂ふ。

僕は、はたと筆を止めて其の勇しき物音に暫、心醉するのであつた。「將校が演習地へ出かけるんだな。それにしても此んなに烈しく雨が降るに兵隊さん達は演習をして居るのだらうか。」僕はそう心の中で呟き乍ら次第次第に大きくしかもはつきりと聞えて來る、そのパカッ、パカッ、パカッ、パカッと云ふ音を送る馬、其の上に乘る兵隊さんに思を馳せて行く

一体何んな馬が演習地へ行くのだらう。鼻の先の眞白な、如何にも丈夫な、早く走りそうな、背の高い馬だらう。そんな馬に今の世一度乘つて走つて見たい。どんなに勇壯な愉快な事だらう。あれに乘つて居るのは屹度嚴かな顏をした陸軍の將校に違ひない。

そう思つて居る間にも馬蹄の音は一と時も止つて居ない。間もなく音は最大限度に達した。僕は思はず前の硝子障子をあけてその馬如何にその人如何にと打ち眺めたが最早向の曲角を曲つて居たらしい。下士の樣な人が二三人足早に過ぎ去るのが、そぼ降る雨の中にぼんやりと浮ぶだけであつた。

やがて數騎の駒の蹄の音はあの勇しい演習地を夢見ながら進んで行くのだらう。一刻、々々、音は小さくなつて遂に平常の靜けさに立ち返つた。それと同時に今迄張りつめた心が一時に解けて何となく氣拔がした。

愈あの軍馬は演習地へ行くのだ。そうして何をするだらう僕の眼前には廣い湖東平野に對陣した南北兩軍の機關銃隊の一齊射擊、歩兵の血湧き肉躍るあの勇壯な突擊、野砲の打ち出すあの物凄い大砲の音が同時に表はれて行く。あの馬はその中を走つて行くのだらう。物凄い雨霰の中を。そう思つたその瞬閒こそ何と愉快な何と莊嚴な氣分であつたらう。

雨は未だ烈しく降つて居る、其の中を皇國日本、非常時日本の爲に一身を抛つて働いてくださる將兵方、軍馬達に對して新しい感謝の念がひつきりなしに、こみあげて來るのだつた。

夜

三年　廣部智彰

星の所々散ちばつた、餅搗く兎の今日は一人しか見えない月夜の十時前だ。

附近の家々の薄氣味惡い迄に靑白い力無き月光で作られた影が、色々な形で明瞭に面白く屈折してゐる。特に屋根の瓦等は魚の鱗の樣にチラ〆〆輝いてとても美しい。

昨年は我が部屋の橫のベランダには朝顏夕顏のしとやかなラッパ狀の花や、一風變つた形の葉が互に錯綜して、その影が机の書物の上にも本箱の橫にも紫色に映つて、興味を湧かせ、葉上の夜露が銀の樣に眞珠の樣にキラ〆〆光つて我等を淸涼の氣分に浸らせるのだつたが、今年等はてんで世話等する者が無く、隅の方に二つ三つの植木鉢はあるが目的の花等は一つもなく刄の葉の雜草許り生長してゐて一寸殺風景だ。

唯時々、勉强に倦怠を覺えた時等よく籐椅子を持ち出して來て出來る限り大きな口を開けて伸欠そして手足の指も長々と伸ばしてダラリと寢そべるのも氣持がよい。唯空には月と星が見てゐる許りで氣樂だ。誰の遠慮も要らぬ。

だがその儘グッスリと一時閒も余りの心地好さに眠つて了ふと目が醒めれば必ず頭上の月が笑つてゐる。私も思はず笑

ひ出したくなる。月を眺めて居れば實際詩的感に打たれるものだ。

月は無情といふが中々柔和で聖母マリアの樣だ。

隣の機織る音が止んで戸のキシる音がする。

近くの喫茶店、喫茶店といふと感じはよいが實は純然たるカアッフエーだ。長濱では喫茶店もカフエーもレストラントも皆ゴッチャにして同一視してゐる。其處からお客でも來たのか急に甘いメロディーが二階にも流れ込んで來た。

前の菓子屋では店先でラヂオの演藝放送が終へたので、早速今度は自分等が尺八とマンドリンとの合奏を演つてゐる、尺八は秋に近づいた今日には一種の感傷的な感じを與へるがマンドリンは余りに朗らかに過ぎ明る過ぎる。

遠くから途切れ〳〵に美しい哀愁を帶びたヴァイオリンの音が幽かに耳に入る。私もこのオーケストラに參加しようと手にハーモニカを持つた。何を吹かうか?あゝ!荒城の月がよい——。何處で鳴くのか何時の間に來たかコホロギの一大コーラスが參加してゐた。コホロギは夜露の樣に冷く淋しく歌つた。私も朗に吹いた。だがその音は夜の野道を一人歩く樣にふるへて聞えて來た。腰掛の下にハイネの詩玉集が落ちて居た。——うらめしさうに。私には今夜はどうもハイネの詩的情緒をしんみり味はふことが出來なかつた。それを味はふ能力はとつくに消えうせて居たのだ。

「お休み——」。今日の最後の挨拶が互に交され次第にガラス戸や戸障子が閉されていく音がする。何時の間にかあのオーケストラは止んだ。

時計が知らぬ間に十一時の君ヶ代を早く寢なさいよと我に警告せんばかりに急がしげに鳴つた。

あゝ!夜は次第に更けて行く。暗い山奥の密林へでも吸ひ込まれて行く樣に——外を歩く人の下駄の音迄聞える樣になつた。今や喫茶店のレコードとコホロギの世界に入らんとしてゐる。微風がソツトガラス戸を撫でた。

或日の學校

一年　大橋壽貞雄

或るそれはそれは、靜かなひつそりした夜の事でした。空には星が青白い光を下界に照して、寒そうに光つてゐます

不圖今まで默つてゐた黑板は、側の机に話しかけました。

「おい、机君大分寒いな」「うん本當に寒い、それに晝は生徒にこき使はれ、夜になるとこうして寒い中に放つて置くのだたまつたものじやない」、と獨り愚痴をこぼしてゐます。

「成程な。此頃の生徒は非常に亂暴だ。物を大事にするといふことがない。鉛筆だつて小さくなると直ぐ捨てゝしまふしノートだつて白紙が未だ幾らも殘つてゐるのにもう使はない

かういふことをするのでは、日本の前途は、安全とは言へないね。」黑板はさも雄辯に語りました。すると、そうだ〳〵と口を出した者があります。見るとそれはバケツ君です。

「今晩は、机君。黑板君。今僕は君等の話を敎壇の横で聞いてゐた。此頃の生徒は本當に亂暴だ。掃除の時だつて穢い雜布水を頭から被らせるのだ。其の上よく洗ひもせず、僕を放つて置く。僕は掃除の事に關係してゐるから、良く生徒の事は知つてゐる。生徒の中には一生懸命掃除してゐる者もあれば、又惡い事をして遊んで掃除してゐない。一度先生の顏が見えようものなら、もう眞面目に一仕事やつてゐる樣な顏だかういふ具合だから、何時も二三十分かゝる。」

「全くそうだ」。と黑板は言葉をそへました。

「僕は幾度か注意しようと思つたが、口が利けないので殘念だ。ね机君授業だつて怠けてゐる生徒が多いんだ。前を向いてゐる生徒つたら半分も無いだらう。左の耳から聞いて、右の耳から出てゆくのも當り前のことだ」。とバケツも言ひました。

外は寒い夜風が吹いています。時々ゴト〳〵風の音の外何の音も聞えません。

其の時、奥の廊下から靴の音が靜かな空氣を破つて、だん〳〵近づいて來ます。コツコツ〳〵三人は相談したかの樣に目を見合せて默りました。

それは宿直の先生の見廻りだつたのです。又コツ〳〵コツと其の音は暗闇の中に消えて行きます。

又三人は安心して話し合ひました。

「ね、君等。明日の授業を見給へ。面白いものだぜ」。

「そうかい」。机は長く返事をしました。

「もう寢よう。ではお休み」三人は寢に着きました。

お城の方で悲しそうな梟の聲が聞えて來ます。窓硝子には薄青い月の光が指し込んで何となく靜かでした。

やがて翌朝になりました。一人、二人、だん〳〵登校して來ます。校内は、暫くは大騒ぎです。

やがてサイレンの合圖に朝禮が始まり、直ぐ濟んで、生徒は敎室に這入つて來ます。「來た〳〵」。黑板は大きな聲を立てました。「しつ靜かに」バケツは之を制し、「おい黑板君机君。それ、一番前から二人目、其の横の後のもだ」「なんだ解り難いなあ。ん、彼奴か。解つた」。と首肯きました。

「あゝ、そら始まつた。先生が横を向いて居られると、直ぐ側の者と話してゐるだらう」。「ううん。話してゐる。今度の運動會の何に出るか。話してゐるのだ。そら今度はゲートルを解きにかゝつた。うゝ彼奴、割合脫け目がないなあ。次の体操の準備だ。授業中、あんな事しても良いのだらうか」バケツも黑板も机も室内を見渡しました。

小使室からの煙が盛んに黑く窓から入つて來ます。數學の

時間で睡いのか、皆細い目をして、退屈そうにしてゐる。
『方程式とは』先生の聲は嚴として響き渡る。それを瞬もせず見つめて居るのは何時も良く出來るA君だ。
やがて一時間終りのサイレンが、校内に響き渡ります。
たつた一時間の授業が辛いのか。皆欠伸をして出て行く。
「ねえ——あんな調子だから、試驗になつたら俄か勉強後鉢卷、一生懸命するけど、平生の不勉強の祟で分かりはしないあゝいふ生徒は、今に落第だぜ」。黑板が自慢そうに話すと「アハハハハ」と笑つた者があります。見れば帽子君です。
「君達は非常によく皆の事を知つてゐる樣だけれど、何よりも僕が知つてゐる。まるで手に取る樣に分つてゐるのだ。
人間といふ奴は勝手な者だ。自分が先生に叱られると、尙更勉強せず遊んでゐる。それでは皆此から生徒諸君が、よく勉強し物事を大事にするやう歌を作らうではないか。

何でも事物を大切に
習つた事は暗記して
本やノートは整頓し
復習豫習を忘れぬ樣に
掃除は綺麗にきまりよく
級は仲よく面白く
準備は前から注意せよ
よく運動しよく遊べ
教室内は眞劍に

朝の彦根

一年　齋藤輝六

琵琶湖の水面には朝霧が一杯に立ち罩めて、薄く紫紺の色を現し始めた。
朝だ。湖國の朝だ。
惡魔に閉された樣な沈默の夜は、一條の光明と共に、又しても平和な一日は明けんとするのである。
德川三百年の治世に於て、赫々たる歴史の一頁を飾る彦根の町に、明るい平和な光は訪れるのであつた。
軒々に立ち罩めた狹霧も次第に晴れ始めた。
僕は今、古い歴史を誇る金龜城に、湖水の香を胸一杯吸つて、兩足をしつかりと踏まへて立つて居るのだ。
おう、其の時、僕は何を感じたか。眼下に明けゆく密集した人家を、或ひは廣々とした琵琶湖を眺めた時、壯嚴の樣な奥床しい樣な、又自然に頭が下る樣な、一種の言ふに言はれない感に打たれたのである。
琵琶の湖を前に、鈴鹿の山脈を後にした、此の神秘的な土地に住める者は幸福の人々である。僕も其の一人だと思ふ時自然と云ふものに對しての感情は何物にも代へられない一種の尊いものであるとつくゞ〳〵感じた。

佐和山の麓を白煙が、今日の樂しい活動の第一人者といはぬばかりに、スピードをかけて通つた。急行だ。
目映いばかりにぱつと日光が、僕の顔を照りつけた。人家のトタン板に反射してきらり〳〵と光る。鳶が何所からか集つて、大きく〳〵輪を描いて居た。湖面はきら〳〵輝き、其の銀波の上を白鳥の樣に遊覽船がゆつたりとした足どりで、白線をひいて行く。
やがて下の方からゴーン〳〵と六時の鐘が響きだした。と同時に工場のサイレンも山に、湖に、幾重にも〳〵廣い輪を廣めながら、靜けさを破つて響いて行く。彦根の人たちは、それを合圖に樂しく一日を働かんと活動を開始するのだつた
沖の遊覽船もボー〳〵と盛んに鳴り出した。
忽ち靜寂を破つて騷しい活動は始められた。
僕も、もう一度爽やかな大氣を心ゆくまで十分に吸ひ、伊吹山の雄姿を仰ぎ見て、今日も精一杯に働くぞと輕く胸を叩いた。
苔蒸した石段一歩々々踏みしめ乍ら、校歌を歌ひつゝ歸途に著いた。

久方のそらのかゞやき地に享けて
こゝろ澄みたる琵琶のうみづら。

折られた鉛筆

一年　西關藤一

ゴシ〳〵〳〵、僕は今日買つて歸つた許りの鉛筆を削り始めた。小刀が良く切れるのか、鉛筆が柔かいのか、誠に氣持良く削れて行く。一度小刀を入れる毎に、先の尖つた長い三角形の削り屑が出來て、木の良い香がして來る。木から芯を削り始めた。もう一息と言ふ所でゴシ〳〵ボキン。到々折れてしまつた。チエッ、と舌打ちしながら又削り出す。今度は芯を削り始めた所で、ゴシボキン。忽ち鉛筆は十五糎許りになつた。「いま〳〵しいなあ」と、獨言しながら、それでも削り始める。今度は先のに懲りてそろ〳〵と削り始めた。やう〳〵の事でうまく削れて、ノートに書き始めた。書ける〳〵すら〳〵、まるでノートを滑つてゐる樣だ。あつボキン一つの點を打つた拍子に少し力を入れ過ぎた爲か、又折れてしまつた。少々じれつたくなつて「頭にHと書いてあるのになんて此の鉛筆は柔かいんだらう」、と呟いてゐると、側に裁縫をして居られた姉さんが、「そらお前があんまり力を入れ過ぎるからだよ」と言はれた。
けれども仕方が無い、又削り出した。ゴシ〳〵ボキン、ゴシ〳〵ボキン、續け樣に二三遍も折れてしまつた。僕の心が

愈々じれつたくなつて行くと共に、鉛筆は益々短くなつて行く。何處にもその鬱憤を持つて行く所がないので、鉛筆が憎くて〳〵堪らず、もう自暴自棄になつて削り出した。そうなると堪らない。鉛筆の方でも此方の仕うちに怒つたものか、何遍やつても錄に削れないで、皆中途でボキン〳〵と折れてしまふ。到々僅かに五糎位になつてしまつた。

「今日買つて歸つた許りの鉛筆を、早速そんなにしてしまつて……勿體ない。もつと靜かに削りなさい」と、側から注意意されても、もうそれを續けて削る元氣を失せてしまつて、一層の事、妹に遣へてしまはうと、もう一度その鉛筆を見直した。先程までは形の整つた六角の綺麗な鉛筆であつたのに、早もう小刀に無慙に切られた、ちつぽけな鉛筆と變つて、その大部分の削り屑が紙の上に一杯に散らばつてゐる。

今頃はあの鉛筆は妹の爲に、忠實に働いてゐるだらか。それとも妹にも見捨てられて、芥箱の底に「私は何の爲に生れて來たんだらう……」と、果無い身の上を嘆いてゐるだらうが。

防空演習の日

一年　中川敬一郎

時は九月十八日の第一時限、大崎先生はにこ〳〵しながら出席を採つて居られる。と、突如として、けたゝましい、サイレンの響、同時に教室の傍のベルが、喧しく鳴り出した。出席をお採りになる聲も止んだ。はと浮腰になつてゐる僕等に、先生は靜かに、

「今のサイレンは、非常召集のサイレンだから、早く運動場に朝禮の隊形に集合しなさい」。

の、お言葉の終らぬ中に、道具は其のまゝに、教室を飛び出して、我先きにと運動場に集合。忽ちに六百の健兒は緊張した、瞳を輝やかして、先生のお言葉を待つて居る。やがて竹内先生が壇上に立たれた。先生は

「今の集合は大變敏速で良しいが、餘りに騒々しかつた。と、仰せられた折は、二口三口喋べつた覺の有る僕は、赤面せざるを得なかつた。

それより控室に入り、今日の防空演習に就いての御講話が有り、我が國家が如何に非常時に遭遇して緊張してゐるかの御說明があり、餘りにも平和に馴れて、非常時〳〵と口癖には言ふものゝ、その何であるかをはつきり自覺しない僕等に覺醒を促された。次いで高鳴るサイレンに、全校生徒は高商グランドの、毒瓦斯演習を見學に行く。一同芝生の上に腰を下して、先づ毒瓦斯マスク、及び防毒着の說明を、軍隊の人に聞く。始めて見る新兵器マスクだ。頗る奇妙な恰好をした物で、着け方と言ひ、はずし方と云ひ素人にはなか〳〵容易な業でない。次いで防毒着は全部ゴム製で如何なる毒瓦斯をも除外すると云ふ兵器だ。其の重いこと、暑いことは、二百米も走れば、汗が五合も溜まると言ふ事が暗示してゐる。今度は、毒瓦斯驅除作業だ。赤いテープの引かれた中を、防毒着に身を固めた人達が、手際よく消毒の晒粉を撒いて居る。予定は着々と進んで、次は毒瓦斯演習だ。一方の草原の中から、十人餘りの高商生達が機關銃や小銃を打出した。マスクを被つた一隊が、之に應戰してゐる。マスク隊の後の方では防毒服を着けた人々が、晒粉で以つて毒瓦斯の消毒任務に當つてゐる。目の前に濛々と煙が立ち出した。煙幕だ。一寸先も見えぬ位……。煙幕の去つた頃には、何時の間にか多勢の戰士達が目前に現はれて居た。此だけの事の一瞬の間に行はれるのだ。昔の樣に十年、廿年にかゝる戰爭など、滅多に有るわけはないだらう。次いで竹内先生の撒かれる催涙彈の一種異樣な氣流に、思はず顏を背むけ、文字通り目に涙した

斯くて高商に於ける毒瓦斯演習の實演は終了した。あゝ、毒瓦斯だ。煙幕だ。催涙彈だと、此からの戰爭はすつかり化學戰になつてしまつた。

人智の進歩に連れて、續々と現れる新兵器。それに依つて被る被害の殘酷さを思ふと、只もう啞然たらざるを得ない。思へば戰爭程、非人道的なものは有るまい。然るに、今や各國は口々に人類愛を叫び、世界平和を希ひながら、競うて國防の充實に大童である。皆、是國を思ひ、國を愛する爲に外ならない。我が國も又然り。開闢以來一度も外國に穢された事のない、我が光輝ある國土を守らんが爲、擧國一致非常時訓練も又必然の結果である。と、痛切に感じた。

虫

一年　木村昌太

小さな虫が、電燈の明りに誘はれて、僕の讀んで居る本の側へ匍つて來た。

「何といふ虫だらう。」

僕の机の端にとまつてゐる。眞黑な羽の、小豆程の體。どうも本を讀んでゐるのに、氣に係つて仕方がない。

「フーッ」と、息を吹いて見たが動かない。今度は力一杯に吹いて見たが、虫はその小さな体を一心に机にひつつけて一向吹飛ばされそうにない。

僕は急に、虫が憎くらしくなつたので、側にあつた一冊の本を、虫の上に乘せてやつた。

暫くして本を取つて見た。虫は急に輕くなつた爲か、一生懸命に逃げ出した。逃がしては大變と急いで又本を乘せ、其の上に又二冊の本を乘せた。

二三分經つて、本をのけて見た。虫はじつとして動かない。死んでゐるのだらうと思つて、鉛筆の先でつついて見たが動かない。愈々死んでしまつたのだらうと思つて、床下へ投げつけてやつた。つぶれる樣な音がしたので見て見ると、虫の体はこなごなに碎かれ、青い汁が板に染まつてゐる。

僕は何だか恐ろしい樣な氣がした。何も殺す氣ではなかつたのにと深く後悔した。そうしてその虫の殘骸を紙で丁寧に包み、火に燃してやつた。

十五夜

一年　北村忠夫

今夜は十五夜だ。弟は今宵の名月を拜まんと、未だ日の高いうちから、物干へ昇つてはしやいでゐる。僕も物干へ出た。日は未だすつかり落ちず、西天は赤く燒けてゐた。漸く夜の帷も下されんとした。東南に走る黑い連山の一峰が、ほうと明るみを帶びてきた。月が出るのだ。風が輕く靜かに頰をなぜる。遠く子供の騷ぐ聲が風の波に送られて耳に入る。頭上を仰げば、星が三つ四つ瞬いてゐた。月が少し頭を出した。弟は「月が出た。月が出た。」と大喜び。月はずん〳〵頭を出し、胸を出し、遂にその優姿を現はした。冷い冷い光が、空一杯に廣がつた。弟は「月の中に兎が住んでゐるのだらう」。と聞いた。僕等も小さい時は、月世界の兎を想像し姿を探したものだ。そして月世界の有樣を、幾度か小さい頭をいためて空想に耽つた事だらう。そして繪本等で、月の世界はお伽の國であることを覺え、その理想の世界を憧れたのである。併し、今の僕等は月は死の世界である。神秘なる魔の世界である。そして、黑く見えるもの、即ち幼時、幾度か空想に耽つた、兎。それは兎ではなくて、冷い死の噴火口だと知つたのだ。幼時は月の世界と言へば、兎を聯想せしめたが、今は死の世界氷河横はり、冷い火山聳える死の世界を聯想せしむるのである。

何處か、芹川の上流で鐘が淋しく毀々と鳴り響いた。汽車の響きが黑く横はる連山にこだましてゐる。月はもう大分上つた。僕はすつかり、ペン走らす姿を明るく照らし出された一點の曇もない澄み切つた此の秋の夜空、大いなる滿月、此の對照、此の配置、實に澄んだ莊嚴さが滿ち滿ちてゐる。

下の方で、「出た、出た月が、丸い〳〵まん丸い」。と、歌が聞えてきた。そして順次に聲か小さくなつていつた。裏の二階でもハーモニカを吹奏し始めた。大變巧い。多分、高橋君だらう。

再び子供の歌聲が聞えてきた。「丸い、丸いまん丸い。盆の樣な月が。」

詩

秋の溫泉行

五年　齋藤數衞

ガッタラ、ガッタラ、ゴトン。
馬車は鈍い律動を以て搖れ
誰もじつとしてゐる。
落葉松林——。
綠のあせた光の中を馬車は走る。
ぽつんとのどかな溫泉行。
靜かに鳥が鳴いてゐる。
「おつさん、此の風船玉ァ
放つたら海まで行くやろか」
「馬鹿なこと言はんとけ」

ガッタラ、ガッタラ、ゴトン。
馬車の轍はあちこち、くねり
けだるそうな馬の足並。
匂高き木犀の林
その芳香の林の中を行く
ひとり牧歌的な溫泉行。
ぽつぽう。ぽつぽう。
あせた深山の鳩の聲。
「おつさん此の風船玉ァ
なんで赤えやろ」
「なんでやろな——」

ガッタン、ガッタン、ゴトン。
馬車の車は左右に搖れる
馬車屋の横顏はがつちりしてる。
流れの岸に赤い山茶花
その上を行く。
淋しいひなびた秋の溫泉行。
ひんから、ひんから。
カケスが何處かでないてゐる。
「おつさん、此の風船玉
つぶしたらなくなつて
しまふやろか」
「うるさいな—。
もう直ぐだぞなあ—」
はい、シッシ——、
馬の尻尾の筋肉がヒリッと動く。

五月の歌

五年　羽根田辰男

五月の野に寢て
五月の野に寢て
ながめた月は
白い象牙の一片
眞晝の夢の果敢ないかけら

五月の堀割
紺青の空に鱗雲浮び
サンとふる五月の陽を浴びて
白い瀟洒な汽船が靜かに
水溫む堀割を通つて行く
淡い旅情をそゝる汽笛をならし
波の音低く通つて行く
旅の日の思を積んで
蘆の若葉を搖しながら通つて行く。

五月の夜雨
蕭々とふる五月の夜雨は
幼ない頃よく吹いた
麥笛の甘酸つぱい香がする。

心のまゝに

五年　橋本末藏

黄色の葉が沈んでゐる手水鉢の中をよく見たら
　ビンコ〳〵ビンコ〳〵
ぼうふらが三匹遊んでゐた。
　いや、たゞ動いてゐた。
　　此の寒い霜の朝に……。
　　さびしいいのち、殘されたぼうふら。

×　×　×

鳥のなかない日はあつても
　鳶を見ない日のないひこね
　　城山の空高く
　　ピーロロと
　　とびは舞ふ。とびは鳴くひこね城下町
　小春の日のあたゝかさ、天守閣の白い壁

別れを想ふ

五年　田中一雄

去年の秋も淋しかつたよ
F君
又かへる感傷の秋
去年の想ひのなつかしいこの城下町
亭々たる古松のならぶ一本道を
雨の日も風の日も
希望に生きて
元氣よく通つた二人
五年の間
通つた一本道
だが總ては樂しき想ひ出。
かう秋が
靜かに訪れては僕の心は淋しい
F君
僕は今秋風吹く
彥中校庭の土手上つて
君を切に思ふ。

ヨットに乘りて

五年　大原一夫

ヨットは走る
波は躍る
その上を鷗がかすめて飛ぶ
空は紺碧だ
眞晝の太陽の輝き——。
あゝ僕の胸は
　あの空の如く——
　　あの太陽の如く——
快！快！快！快！

力

ハンマーが躍る
　カーン、カーン
筋肉勞働の雄叫び
もり上つた肩
たくましい腕つぶし
黑ずんだ顏
すべてが力だ
魅惑的な力の旋律だ

滅

五年　丸岡芳之

私は唯——考へてゐる。

×

蟬と時計とが
一人ぼつちの私の室の

メロデーともエレジともなる
唯一の奏樂者——。

×

わづか數日の果かない生涯を
自由に面白くとび廻る
蟬よ！　お前は樂しかろ。
でも——
一人ぼつちの時計は
永遠の命を表すかの樣に
深嚴に泰然として時を刻む
が——お前は淋しかろ。

×

喜悅と悲哀との共有は
神の創造による
「生」と「滅」と

×

永遠の生命を持つ時計も
數日の生命しかない蟬も
——その
「生」の果てはやはり「滅」

×

考への統一した一直線上には
唯平凡な——
「萬物悉く滅に歸する」。

母校

五年　小野豐久

母校よ懷しい校舍の庭よ
眞白でつやのいゝ紙に
大きな校印の押された
卒業證書を手にして
校門を出てから
もう幾年たつたらう
あゝ今でも眼に浮ぶ
運動場の隅の
藤棚の花房の中には
熊蜂がうなつてゐた
絹絲雨の水溜りには
それが皆明るく映つて見えた
そんな墓はしい思出ばかり
始業のかね心ときめくかね
辨當箱と草履袋をさゝげて
幾年間通つたことだらう
廊下　小使部屋
二階の教場へ行く曲り階段
紅い雞頭花と蜻蛉の流れる窓
オルガンを彈いてゐられた
先生の顏も
もう幻のやうで思ひ出せない
子燕のやうに口を開いて歌つた
みんなはどうなつてゐるだらう
あゝ　變らぬまゝでゐてくれよ
變らぬまゝで居てくれよ　母校
思ひ出すと眼が涙で一杯になる
私達みんなで水をやつた花壇も
藤棚も　古い校門も　運動場も
變らぬまゝでゐてくれよ
あゝ　變らぬまゝでゐてくれよ

卒業せられる人々に

四年　藤關平三郎

雛は卵殼を壞つて無限の空氣と光の中へ集立つ。
そして鳥は大空を翔り、その翅の一打ちごとに、
彼は大空が無限であることを經驗する。
かれは翔ゆれども翔ゆれども遂に其の翅が無限の外にかれを運ぶ事の出來ない事を知る。

彼等の歡喜はこゝにある。かれは無限の世界に、
羽打つ事を想う時、自分の全生命を自覺する
無限の創造を意識する。そこに彼の生命の歡
喜がある。
鳥は無限の大空に翔つ、友を呼び交ひ羽音强
く或は輕く。
一條の光明を求めて大空を。
翅の下遙かなる、我古巣を顧つつ。——。
卒業せられんとする人々、古巣より處女飛行
を成さんとする小鳥。
おゝ君が社會への第一歩を力强く、大望の完
成せらるゝ日を數へて待ん。

幼なき日

四年　西島輝夫

櫻が咲いてゐたよ。草花も咲いてゐたよ。
僕一人で其上に遊んでゐたよ。
蜂が飛んで來て僕を刺したよ。
泣いたお目々に蝶々が舞つてゐたよ。
お日樣が照つてゐたよ。蟬が鳴いてゐたよ。
僕一人で玩具のボート浮べてゐたよ。
遠くへボートが流れて行つたよ。
泣いたお目々に波が躍つてゐたよ。
紅葉が色づいたよ。よいお天氣だつたよ。
僕一人で紅葉見に行つたよ。
お家分らず迷子になつたよ。
泣いたお目々を母が覗いてゐたよ。
雪が降つてゐたよ。霰も降つてゐたよ。
僕一人で雪達磨を作つてゐたよ。
お雪ちらちら達磨のお顏見えなくなつたよ。
泣いたお目々につらゝが下つてゐたよ。

兄を想へば

四年　西島輝夫

兄を送りて、家に歸りぬ
我たゞ獨り裏なる庭に出で、空を仰ぐ。
寒々として心持ち斜にかゝる冬の月
我が上に高くまたゝく、
星もまた。
我が心舞れじ。
魔の手の如き雲の、
東へ、東へと、
我が遺瀨なき心を乘せて走る。
兄、兄はすでにゆきぬ
何處とも無く閑ゆる寒念佛の鐘、汽車の響も
我が心を搖がす
兄は今何處をいそげる
兄やいつこの地にかへる。

日の本の民

三年　保滌義三

一、世界全土の光源ぞ
　亞細亞大陸　東海の
　波打つ磯の松原に
　白砂輝く　秋津洲。
二、波濤犯して燦然と
　輝やく旭日　出づる國
　萬世變らぬ神のみ血統
　君仰ぎ行け　嗚呼日本。
三、大平洋の波の底
　滿蒙の地に埋もるゝ天然の大寶庫
　九千萬の同胞と
　いざ共に守らん　正極を。
四、大道常に明らかに
　三千年の　歷史は語る

雲霧拂ひて萬世に
道たどり行け　おゝ國民よ八千萬。

秋の夕

三年　石田一夫

ゴーン　ゴーン
何處でなるのか夕の鐘
黃金の波のあなたから
赤い夕日のあなたから
暮れゆく空の夕がらす
仕事を終へし村の人

ゴーン　ゴーン
何處でなるのか夕のかね
冷々とした秋の風
木の葉チラ〳〵秋の風
野路を群とぶ赤とんぼ
家路を急ぐ村の人

路傍の秋

三年　淺野實誠

穗波立つ野邊
秋風のそよぎ渡り
色付きし千草のいとほし
　野川の岸の名なし草
　森の梢に
　忍びよれる秋の色深し
陽は西にあり
ひゞくは遠き寺の鐘
我が歩む野路遠し

三年　岡嶋正延

土打てば土は響くよ
　輝ける生みの力に
稻刈れば稻は囁く
　收穫の尊き心
　今こそ更生ア、更生よ。
淸らかに海は巡り
　空靑し我等の祖國
新しき世界の中に
　微笑みて　立てる王者よ
　今こそ更生ア、更生よ。
闇を裂く光の如く
　起ち上れ共に手を取り
胸躍る若き希望に
　美はしき樂しき國へ
　今こそ更生ア、更生よ。

小さな島

三年　岡庭益男

誰かに聞いた話やう
それとも夢で見たのやら
遠いどつかの海の上
小さな島があるさうな。
其處では綺麗な花が咲き
萎んで枯れる事もなく
ゆかし香のゆら〳〵と
島いつぱいを包むとか。
そこに住んでるものは皆
玉白の羽の鳥ばかり
花の間を鳴きながら
樂しく樂しく飛んで居る。
靜かな波はさら〳〵と
岸邊のどかに洗ひます

水晶の岩　銀の沙
赤い珊瑚の枝ばかり。

雨降る庭の窓により
今日も今日とて思ひだす
僕も小ひさな此の島に
住んでも見たい、行きたいと。

親友よさらば

三年　杉山十三雄

過ぎ逝きし三とせの春いづこ
金龜ヶ岡の學び舍を
なぞ君とても去り行きし。
君よ學びの窓の邊に
嬉しく樂しく語らひし
そは皆夢か。
過ぎし日の
君の面影追ひ行けば
想ひ出多し
櫻咲く母校の庭。
あゝ歡樂も哀愁も
思へばはかなし

世の運命
また何時の日か相會はむぞ
さらば君永へに！
雄々しくも立て健男兒
離るゝとも身は同じ若人爛と
輝やく希望　向上の……。
我等が使命を果すべし
金龜の學舍時に思ひ出でて
いざさらば

思ひで

一年　杉本寛

去年
野球をしたボールが飛んで
どうしても出て來なかつたくさむら
今その叢を通つてゐる
なつかしいボール
なつかしいクサムラ

池

池
村を離れた池
どすぐろく濁つた池

野ばらが周りをとりまいてゐる
大きな杉林をさかさにうつして
時々小さな波を立てゝゐる

夜

九時十五分
私は辭書を引いてゐた
雨戸にもれる雨の音
耳をすますと
庭の池の鯉がはねてゐる。
明日も雨か。

短歌

非常時日本

平井乙麿

日に日に迫る非常時日本！手握れば奔る血の赤さに祖先の純潔を信じよう
非常時日本は祖國の純潔な血潮をそこらの木から石から噴き出してゐる
街を彩る日の丸の鮮しさが裝塡された爆藥に民衆を驅りたてる
切れば奔流る純潔な血潮が發火した火繩を握つて歩かせるのだ
木から石から非常時日本は奔る歴史に眼覺めて血潮は赤いしぶきをあげる
旗日の衢を激し流れるラウドスピイカァ　ラヂォの群衆らひそかに拳を握る
非常時日本は心の魂を掘りしめた　掌をひらけば赤い血たらたらと流れた
掌にぎれば赤い血が奔る非常時日本が心の魂をしめつける
じりじり無氣味なものが近づいて心の魂を握りしめる——非常時日本！
夢を切れば眞赤な血が奔るベットを並べて非常時日本と眠る

冬景五題

陽がおちて風が出たサンマを燒く匂ひ冷い靴音におびえながら衢を急いだ
風のやうな樹林のなびきかた雨の角度に傾斜した傘が幾つも幾つも窓を過ぎる

最後のカレンダーは嵐のやうに腦板を叩いた眼をつむるとそんな記憶が幾つも浮びあがつた
住宅の戸口の犬ポストマンの冷たく磨かれた合羽樹木は雨に濡れ風の方位に光る
腦板をかじるある豫感３３㌢ペットの窓にせかせかとポストマン近づいて來る

蜘蛛

藤田一一

生活の意慾におされて蜘蛛は策源地を空中に形づくるのだ
北極洋を中心として廣がる地圖の上を蜘蛛は航行をはじめる
晩春の蜘蛛は體液を凝固せしめ澄明な綱を引き延ばし引き延ばしてゐる
位置を計算し方向を數學する蜘蛛の叡智は入陽を取りまいて動きはじめる
數學的に正確な指先で熱心に描いてゆく蜘蛛のコンポジション
自分の既定設計を終へたといふ喜で蜘蛛は疲を感じない
澁面の多足動物ではあるが一つの技術を體得してゐて滿足がある
恐ろしい眼付で空中をみつめながら蜘蛛は原始掠奪に生きねばならぬ
蜘蛛の蓄積された經驗意識が彼の姿をかくまで野卑なものにした？
醜い形の蜘蛛も生きねばならぬ、黑く光る瞳の視野を廣けて
悶死する蠅、原始掠奪であると云はれても蜘蛛は滿足してゐる
無言のうちに終つた蠅との闘爭ではあつたが、蜘蛛は冷やかな笑を浮べた
餘光をうけた蜘蛛の鮮な斑點も決して彼の虚榮心からではない
蜘蛛の殘忍性も、耐えられぬほどの忍從をよぎなくされた爲だとしたら——

○　五年　羽根田辰男

土産の白襷人形に奥日光の原始林を思つた
珍らしい早起きの臭覺に密柑の花の香が軟く
來た
空は水淺黄——。諸手をあげて六月の朝の空
氣に胸をふくらます
窓あけて流るゝ風と語りたり哀れひとりの旅
のわびしさ
夜更くれば銀河の流れ影うすく對馬の空に月
落ち初めつ
たまさかの船なればなつかしき連絡船のペン
キの香
夜の海にうそぶきをればうれしかも口笛吹き
て和す人のあり
滿蘇を旅するらしき劇團の月を見上ぐる子の
濕れしつぶら眼
薔薇色の朝靄のうちに照り映えて靜かに浮ぶ
雞林の山脈
靜やかに朝海滑る我が船を迎ふる鷗の靄眞白
し
公園をさまよひて知る春の香を胸深く吸ひて
しばしいこへり
雲洞の光の下に朽ち立ちてヨーヨー賣は櫻見
てあり
夜ふけて押葉見出でぬ旅の日の長野の町はな
つかしとあり

○　五年　田中一雄

校庭の土手によりつゝこの友と別るべき日を
想ひ淋しむ
いつになく今日は心のおちつきて母にくはし
く物語りけり
蚊のうなり滿つる夕べの部屋ぬちに心せはし
く物書きにけり
向ふ山に飛びてゆくらんひぐらしの小さき姿
銀色に見ゆ
燃え立ちし躑躅の焰よ闇みゐる皆の瞳に赤くう
つれり
初春の畑耕して土籠る蛙をひとつつきさしに
けり
こつ／＼と茶碗のふちで卵割るその淋しさよ
病み臥しおれば
蟬ひとつ松の大木をひびかせて夏の眞晝に鳴
きゐたりけり

雜詠

五年　田中一雄

夕立や川面にうつる雲の峰
町並みをうかして消ゆる花火かな
ともしびや名もなき虫のつどひける
蜩のカナ／＼となく城の跡
春雨やショウインドウの灯のくもり

俳句

五年　大原一夫

夕立や蟬一しきりなきながら
秋近き濠端の風　星月夜
カタカタと鳴子に野面見渡しぬ
秋深し落葉片よる音をきく
紅葉狩の　醉客みたり彦根驛

五年　井上　八右衛門

毛氈に花こぼれをり桃節句
月今宵屋根に小猫をみつけたり
時鈴の音　この窓やきくの花
餅つきや外はしきりに雪のふる

五年　竹野　正司

春晝や沖かすかにも消ゆる舟
水あびを終へて暑さを覺えけり
虫の音も淋しくなりて秋くるる
雪の朝子等雪食ふときほひ居り

五年　藤川　愈

名月やさすがに虫の聲のよき
樹のかげのそのまゝしるし月の庭
豊饒の野はしづもりて今日の月
月のかげ障子の隙を通しおり

五年　小野　豊久

春の野に自轉車をねかせる野球を見る
春の日ざしうら〳〵か都の友に手紙を書く
夏の夜口笛を一人吹く
あとの草むらに螢の光るなはて道をゆく
新調の蚊帳の香を力一杯吸うてそしてねる
秋深し水飲みに寄る山の寺
秋晴や雀のとまり居る鬼瓦
冬の朝大根車をひきゆく子供、街
教官の號令たかく聞え來る午後の教室

三年　小菅伊三門

虫の音に夜の風秋と覺えたり
涼み團子のまどゐに外は雨ふりて
さくら散る花ちる白き櫻ちる
とんぼを追うて自轉車はしらせぬ

一年　西　關藤一

川へはまりさうに飛ぶなるいなごかな
夕蜻蛉つい〳〵飛べる舟の上
秋の月流れのゆるき川の中
石どうろうの蟬までうつす庭の池
秋晴れて煙突高き煙かな
電燈の今宵忙し夏の虫

一年　筑山　徹

秋風に色かたまりしなすびかな
秋の道うづめて萩のさかりかな
暮方の空秋にして雲高し
初柿を山と盛りたる八百屋かな
滿月やすゝきが原を通りけり
秋櫻色とり〴〵に咲き亂る
小春日やレンズに寫る琵琶の湖

一年　福原快稔

落されて丸くすねたる毛虫哉
燒きすてゝ毛虫哀れに思ひけり
水泳大會先生たちの韻の黑さかな
日に光る松の雫や今朝の霜

一年　鹿谷武雄

寒空や伊吹は白き雪にして
雪ちら〳〵道さむ〳〵と人の來る
熟れた柿べつたりふみし草履かな

縣下聯合演習參加之記
愛知川原之遭遇戰

五年　橋本末藏
　　西村久雄
　　相場德三

九月廿六日午前七時、我等四五年生二百餘名は縣下聯合演習に參加すべく物々しく武裝を準へて校庭に集合した。それより分隊の編制、彈藥の配當等あり珍しく澤山配分された彈藥にみなほく〳〵もの。

八時五〇分、近江線彦根驛を出發、今度の演習の行はれる八日市に向ふ。愛知川にて下車した我々は其處を出て島川に到着、持參の書蜂當を平げ少憩の後集合、こゝに於て北軍支隊の第一大隊長竹内少佐殿より大隊命令を承る。

因に第一次戰の北軍の想定は次の通り。

一、伊賀方面ヨリ北進スル敵ヲ壓壞シ成ル可ク廣ク湖東平野ヲ領有スベキ任務ヲ以テ長濱高宮ヲ經テ前進シタル北軍支隊ハ九月二十六日午後一時二十分其ノ尖兵ノ先頭ヲ以テ島川東南方十字路ニ達ス

二、此ノ時迄ニ支隊長ノ知リ得タル狀況左ノ如シ

當面ノ敵ノ兵力ハ略我ト同等ニシテ正午頃石原（八日市南方二里）ヲ通過北進セリ

大隊命令の下るや我が北軍第一大隊の第一中隊は尖兵中隊となり第一小隊は尖兵小隊となりて愈々本格的に戰備行軍に入つた。我が中隊の元氣溌る旺盛にして、戰の以前に既に敵を呑むの概を示してゐた。島川より勝堂、小田刈を經てどん〳〵前進する。既に島川出發に際して、尖兵小隊より出した歩兵斥候から其の報告がつぎ〳〵飛んで來る——。敵は愛知川彼岸に陣地占領既に散開を終へてゐます！——敵の主力は、八千代橋上流にあり、全線約千五百米！——。赤の吹流しを附した味方の飛行機は我等の頭上すれ〳〵を飛んでは通信筒を落下する。愛知川原に近づくに從ひ道々處々に騎兵斥候の奇襲を受けたが我軍勇敢に之を擊退して猶も前進する。

既に愛知川の彼岸に待陣せる敵前六百米、大隊長の命を受けた中隊は、其の尖兵小隊を八千代橋の左右に亘つて配置し、順次第二第三小隊を其の上流堤防下の森林中に散開し、こゝに火線の構成を終り無言の中に堤防の傾斜の草中に身をひそめた。

戰期愈々熟す。敵の飛行機は既に我が軍の陣地を認めて、ぐつと斜に下降して來てはダツダツダツと猛烈に機關銃の射擊をあびせかける。

進軍喇叭劈曉とあたりにこだまして鳴り渡れば「すは!!」とばかりに一齊に堤防上に頭を上げ、遙か彼岸に散開せる敵の散兵目がけてドンドンドンドン一齊射擊をあびせかけ互に分隊の堤防を越えるのを援護する。敵の機關銃此の期逃さじとばかりにダツダツダツダツダツダツ〳〵〳〵と息つくひまなく彈丸の雨を降らせば、我が軍の機關銃一刻の猶豫も與へず銃口は續け樣に物凄く火を吐く。ビユーン〳〵、ダツ〳〵〳〵、ビユーシ〳〵、其の物凄さ、天地を搖がす銃聲砲聲、實戰さながらの狀況だ。

偶々愛知川は水流れて其の幅約五間、深さ膝を沒する狀態であつたが我が勇敢機敏なる北軍は如何なる障碍も物かは「何くそつ!!」

と勇躍水中に躍り込んだ。ガバ〳〵〳〵あちらでもこちらでも飛沫を頭まで上げて徒渉する。腰から下はずぶ濡だ。其の氣持の惡い事。だが敵の射撃は益々急だ。一刻の猶豫もならない。死物狂ひで之に應戰し乍ら猶も躍進する。

敵前百米突！、と折しも起る突擊前進のラッパ！「突擊に――ッ進めッ!!!」誰もかも我遲れじと突進、「突込めッ!!!」「ワアーッワアーッ「ワアーッ、ワアーッ」と喊聲をはり上げて突貫今や將に肉彈戰にうつらんとした時早くも響く休戰ラッパ、みんな銃を擬して立止つて初めてほつと一息した。秋晴れの太陽が一線に並んだ我等の銃劍にギラ〳〵輝かしく照り映えてゐた。――我等の勞を稱ふかのやうに――。時正に、□時□分。

之にて第一次戰たる愛知川原遭遇戰を終へ之より外(村の名)に入り飯盒炊焚だ。眞赤におきつた炭火の上にかけられた自分の飯盒からぶく〳〵飽の出る嬉しさ。早速降して蓋を取つては、ふつくり出來た美味しさうな飯に鼻をぴく〳〵うごめかしたり、後の炭火で今日の合戰に濡れた衣類や靴を乾し乍ら功名手柄を語り合つては打興じてゐたが中天に銀河の冴える頃既に第二次戰の時刻到來。

第二次演習

「詹根方面より中仙道を南進したる北軍師團は草津方面より北進せる敵と九月二十六日正午以來內野、西老蘇、常樂寺、等の線に於いて交戰し勝敗未だ決せず日沒となりて近く敵と相對峙しあり。」

右の想定に基づき午後八時三十分愈々第二次演習は開始せらるる事になつた。愛知川川岸に於ける遭遇戰後暫く休息した我々は充分に英氣を回復し今は全く元氣そのもので命令の下るのを今や遲しと待ち構へた。

時しもあれ「出發せよ」との命令は下つた我が北軍支隊の任務は敵主力の側背を脅威し師團の戰鬪を有利ならしむる事にあるのである。この目的を以つて我々は外を離れて朧に霞む仲秋の半月を戴いて肅々と八日市方面に向つて行動を起した。夜間の行軍は書間のそれより遙に心地よい。そして沈默行軍だ、雜談なんかする者は誰れも居ない。土を踏む靴音のみざく〳〵と聞える。

我が支隊が八日市東方地區に達したる時支隊長の手許に左の狀況が入つた。

「我と兵力略同等の敵の一縱隊三雲方面より前進し目下飛行場南方地區に展開中。」

この報告に依り支隊長は飛行場北方地區に陣地を占領當面の敵を攻擊すべく決意され我が第一大隊には飛行場西北部分に陣地を占領せよとの命令を下された。彼我の距離僅に三千米戰機頓に熟した。

三千米の間近に敵を控へての行動まして夜間のそれは、最も靜肅を要する。既に夜霞のしつとりと降りた飛行場の草の一踏一踏に注意を集中して漸次西北端に移動し隊形を變じて戰鬪隊形となる。右第一中隊中央第二中隊左第三中隊である。

各火線の前には歩哨更にその前には監視哨と嚴重に警戒される。凡ての配備全く終つた時に九時半。

朧に照つて居た月は西の端に運行し十時前とつぷりと落ちあたりは唯だ星あかりのみとなつた。同時に猛烈な斥候戰が始まつた。我が第一中隊は西北端松林附近に位置せる爲め殊に多く敵斥候を驅退せねばならなかつた。

「誰れか」「誰れか」　といふ鋭い推何の聲に益々緊張を加へられる。味方の斥候も勇敢に敵陣地に侵入して有力なる報告を齎す。

耳を澄せば騎兵斥候の馬の蹄の音がカッカッと聞える。そしてそれを擊退するらしい銃聲が夜の靜寂を破る。

夜氣益々加はるにつれて戰線も追ひ追ひ靜かになつて行く。

九月下旬とは言へ夜の寒さは相當こたへる。じつと腰を下して居るその尻のあたりから夜露でぼと〳〵に濡れた靴の先きから刺す樣な寒さがじくり〳〵と昇つて來る。背蠻を脊負つた肩が冷え切つた腰が更に脊柱が堪らなく痛む。そして苦しい樣な眠りを覺える。ごろんとひつくりかへりたい樣な氣がする。

午後十一時支隊長は師團長より左記要項の命令を受領した。

1、敵の陣地は飛行場南端、御代、市邊、蒲生町を經て其の西方に亘れり。

2、師團は豫備隊たる第百一聯隊及支隊を以つて蒲生町及飛行場南端の敵陣地を夜襲し之を奪取せんとす。

3、支隊は一部を以つて飛行場西北部附近を堅固に守備せしめ主力を以つて飛行場東南端の敵を夜襲し其南方高地線に進出すべし。

右命令に基づき支隊長は我が第一中隊をして飛行場西北端を占領せしめられた。我が中隊の任務や實に重大と言ふべきである。

時はいつしか移つて二十七日となつた。寒氣益々烈しく口を突いて出た聲も變にささけて輕い息苦しさを覺へる。

隣に居た第二中隊はこつそりと引き上げて東北端へ移動した。夜襲の爲めだ。そして愈々我等は南軍支隊を一手に受けて防禦せねばならぬのだ。

輕機關銃も配屬された。照明の用意も出來た。敵の夜襲は近きにあるのだ。

星が不思議に掠れ出した。數もぐつと減じた。

夜襲は近きにあるのだ。全軍に緊張の氣漲る。双の眼を輝せて前方を凝視する。

時しも飛行場の東南端にぱつと火の手があがつた。我が夜襲軍に對する敵の照明だ。猛烈な銃聲が起る。そして突擊するらしく喊聲か聞へる。敵の夜襲も愈々近い事を知る。

敵の照明も消え銃聲も止むと飛行場は又もとの靜寂に歸つた。なんだかひし〳〵迫る樣な氣がする。夜襲だなと思つた瞬間照明の火の手がかつとあがつた。

見よ！照明に照し出された敵の姿を。幾重にも重なつて今しも突擊に移らうとして居るではないか。今だ。分隊長の裂く樣な射擊號令と同時に此處を先途と火力は注がれた。愈々最後の時は來た。

「突擊！」「突擊！」

第二次演習も終つた。其の場で人員を集結して眠れる町、村を通つて下大森へ向つた。時に午前一時

第二日

我北軍支隊は第二次戰に見事敵を軍門に降して、一旦下大森まで退いた。拂曉戰には大分間があるので十字路附近に腰を下して休む休んでゐる內についうつら〳〵とする。氣づいて見ると起きてゐるものは少い。草の上に仰向けになつて居眠る。晝間の勇士も今は白河夜舟に帆を上げて早や龍宮にぞ着きたりけるといふ所だ。――土の冷さに漸く目覺めた頃は空も白んできたかと思はせられた。水にぬれた靴から寒さが上つて來る。少し寒い。

薄衣の連中が少々ふるへながら團つてぼそ〳〵と話し合つて居るのは、晝間の手柄話かその中に夜も氣の爲か少し明けて來たやうに思はれて來た頃、突然集合命令が下つた。愈

々第三次戰に入る。第三次戰に於ける東軍想定は次の如くである。

一、八幡方面ヨリ東進スル敵ヲ攻擊スル目的ヲ以テ、愛知川左岸地區ヲ西進シタル東軍支隊ハ九月廿七日午前四時卅分、其ノ先頭ヲ以テ下大森十字路ニ達ス。

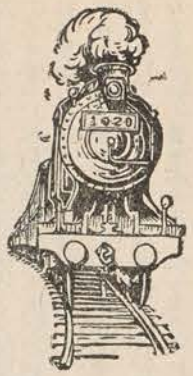
一、此時迄ニ支隊長ハ略我ト同等ノ敵ハ武佐ヲ通過東進シ、目下四辻並市邊附近ニ分進中ナルヲ知リ直チニ飛行場東端ノ線ニ展開シ此敵ヲ攻擊スルニ決ス。

斯くして午前四時卅分、下大森十字路より行動を起し暗の中を飛行場に向けて行進した冷い朔風が身にしむ途中に深い林を通り飛行場附近に到つた頃は夜は全く明けきつて、聯隊の兵舎も北方に續く山々もはつきりとして來た。白雲のなびくが如く山々の裾に深い朝霧?がかゝつてゐる。兵舎の南側附近にて停止した。こゝで大隊長より第一中隊は大隊の右一線となり左より三つ目の格納庫の前より左端の格納庫に到る線に展開すべしとの命を受ける。それより中隊長、小隊長と次第に命令は傳はり我等は格納庫の前にずーと散開した。朝露にしつとりぬれた草の上に銃を構へてぢつと前方をにらむ。飛行聯隊の起床ラッパもよそに聞いて更に前方をにらんで待つ裡に、俄然、敵が砲擊を開始した。白煙パッと上ると見る間に、物凄いばかりの砲聲がドドーンと空のすみ〻〻にまで響く。之に續いて我が砲兵もその兵舎の南側附近の陣地より攻擊を始める。彼我の砲聲は交互に起つて恰も雷鳴の如くにとゞろく。更に續いて左大隊の攻擊が開始された。是に及んで、機關銃、小銃の銃聲が俄に激しくなつた。重々しい、併し激しい機關銃の音に斷續的な小銃の音がそれに交錯する。然るに我中隊には未だ射擊命令が下らぬ。もどかしがる内にも敵味方の銃砲聲は益々盛になる。敵影もちらつき始めた右の方やゝ遠くに統監旗が見える。北端には早くも突擊の喊聲が聞える。何だ早過ぎるぞと不審がる内に小隊長の射擊命令が下る。そら來た！續いて分隊長の射擊號令。號令の終るか終らぬかに早くも右の方でビューンと打ち出す。これを始めに今ぞとばかりに我軍は打つ！打つ！左も右も、今は全線に亘つて、銃聲益々猛烈！すぐ横にゐる機關銃の赤い火を吹くのが見える。ビューン／／といふ小銃の音がドッドッ／／とうなる。機關銃の音に益々激しく交錯する。勇壯！壯快！前進又前進。元氣益々旺盛。銃砲聲は天地に轟き、硝煙の香はあたりに漲る。今は唯音と音との交錯のみ。否、音を通しての激烈な爭ガ。敵に接近するに從ひ、援隊は全線に互間增加されて戰益々激烈となる。躍進又躍進！著劍！今や銃聲は激烈の極に達した。敵は目前に迫つた。

「突擊に——進め！」突擊ラッパ！銃劍引つ下げて唯走る走る。「突込め！ワアーッ！ワーッ！／＼／＼。咽喉もさけよと喊聲をあげて、銃劍ひらめかして、遮二無二、突進した。彼我接近して將に壯烈なる白兵戰に移らんとした時、休戰ラッパは高く鳴りひゞいて茲にこの意義ある演習の幕はとぢられた。

十五分休んだ後、敵も味方も共に兵舎前に整列して、騎兵の襲擊並に分列式を見學した騎兵の規律ある動作、殊にあの突擊のときに一團となつて喊聲をあげて突込んで行く勇敢さには感心したが、それ以上に軍馬のよく訓練された、我等よりも規律ある動作振りには全く感心した。終つて朝食、朝食後閲團隊形に集合。直ちに閲團。健兒等の整然とならぶ前を知事閣下以下の方々が馬上ゆたかに靜々と通つて行かれる。之に續いて分列式。伊香

農軍東隊の奏する勇壯な行進曲裡に堂々と進む健兒等の活潑な步調には、演習のつかれなど更に見えず、非常時青年の意氣が充分表れてゐた。



修學旅行記

第四學年關東方面修學旅行の記

◇故郷よ、しばし——箱根から江の島へ

旅!!一週間の修學旅行!!吾等は四年になつたときからこのチャーミングな言葉が一入頭にこびりついてはなれなかつた。

それは毎日々々の單調な生活から逃れさしてくれ、そしてすべてを忘れ美しい未知の天國を樂しみ、未だ讀まれてゐない秘密の本を繙くのである。

五月七日、此の日各自は土產物のぐる／／まはりくるつてゐる頭で驛に集合する。夜の九時四十五分。列車の窓は御見送りの諸先生を、又彥根をパッパッと圖に消してしまふ。

終つて知事閣下以下の方々の講評訓示その他があつて、最後の　陛下の萬歲三唱を以てこゝに全くすべては終つた。

やうやく席を見つけて眠るつもりで坐つたが仲々眠られぬ。車中は雜談爆笑どよめき等々々とても騷がしい旅である。名古屋通過、時に十二時五分前、豐橋通過—あゝもう後は、しらない……ガタン／／／／ゴトン烈しく振れると眼をちよつとさます。

とまた寢る。

そしてハッと何度目かに氣がつくと窓外は未だ明けきらないもやの中に灯がちらほらする。靜岡驛で洗面、とても氣持よい。ゆつくりしたので乘つたと思ふと發車。早速辨當を開ける。あたりは薄紙をへぐが如く明るくなり車中より日出を拜す。「陸奥だ!!長門だ!!」叫聲がそこゝに起る。はるか駿河灣の彼方朝日の輝く金波銀波の波間に山かとうたがふばかり窓を壓する吾帝國軍艦陸奥の英姿。ひるがへつて海邊には今將に働かんとする漁夫の日やけした顏、漁船がみへた。今汽車は喜びに戰きながら黎明の地を走つてゐる。

三島着、ついで三島驛で電車を捨て驛前に勢揃ひ間々休憩し箱根にむかつて出發。

吾等はかくして未知の秘密の書物の第一頁を讀破したのであつた。(上田良平)

明くれば今日は當に五月八日、旅行第二日の朝だ。

眠れぬ目をこすりながら窓外の景色に見入る。蜿々と續く春の野、點々と黑く散在するのは湖沼であらう。野も山も町も村も黑き帳におほはれて、黑く深いねむりの中に靜まりかへつてゐる。唯車の音がごう／／と夜の靜けさを破る。それにひきかへ車中のにぎやかさ、眠れぬ者の談笑、眠てゐる者の輕いいびき、二つが相合して旅行の樂しさが春の如く車内に滿ち／／てゐる。假眠をむさぼること